

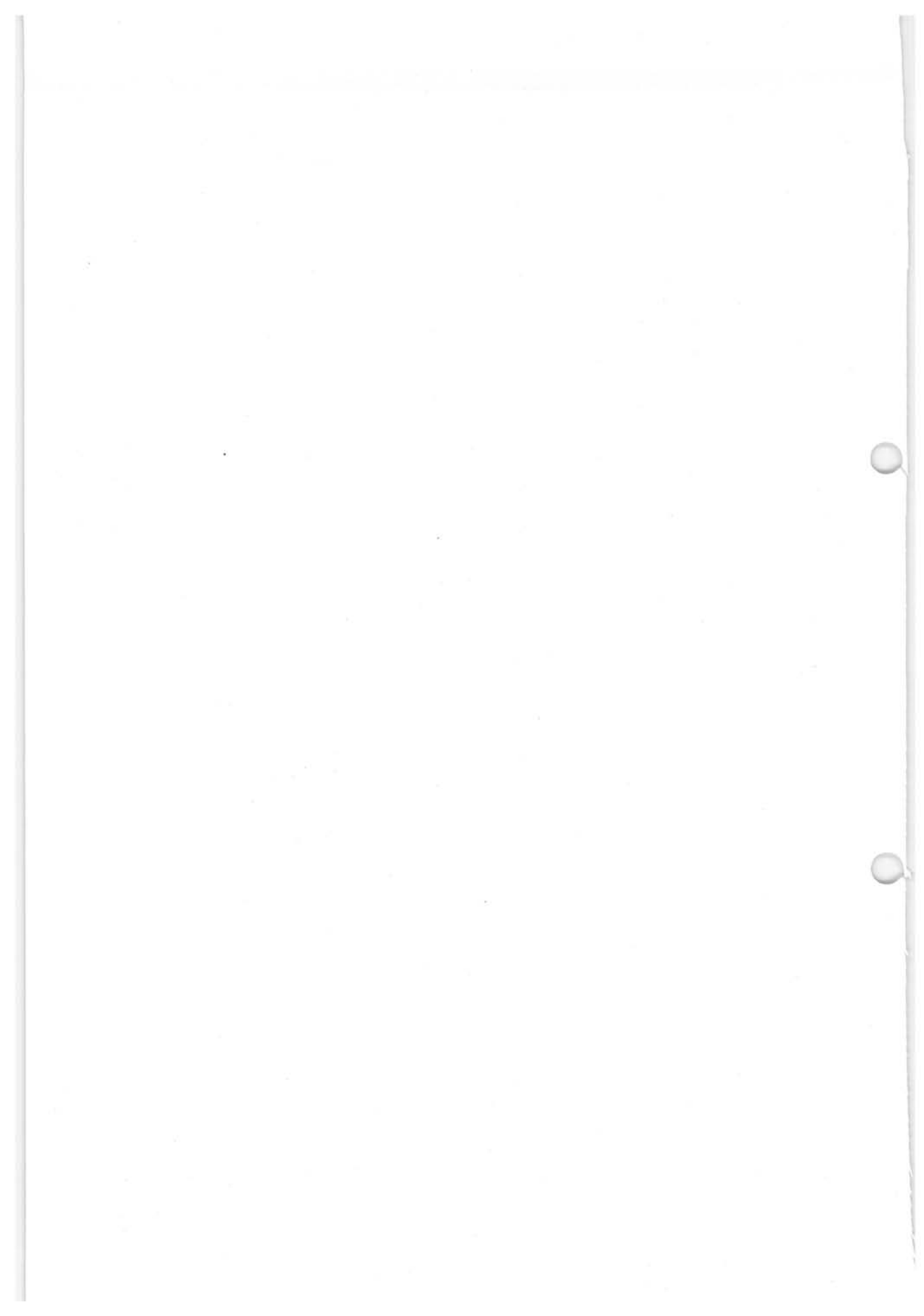
愛媛県臨床病理研究会年報

第 1 4 号

(通算16報・終刊号)

1 9 9 1

愛媛県臨床病理研究会



< 関連医療機関および会員 >

愛媛県がん予防協会	松山市味酒町1丁目10-5	小川一雄	会長代理
愛媛県医師会	松山市三番町4丁目5-3	吉野章	会長
松山市医師会	松山市柳井町2丁目85	村上郁夫	会長
松山市医師会検査センター	松山市柳井町2丁目85	河野恒文	所長
		(故) 今川玄一	
		(故) 山本司	
国立病院四国がんセンター	松山市堀之内13	石光鉄三郎	院長
		森脇昭介	
		元井信	
		万代光一	
		北村幸郷	
		山上啓太郎	
愛媛県立中央病院	松山市春日町83番地	重松授	院長
		田尾茂	
		古屋敬三	
松山市民病院	松山市大手町2丁目6-5	宮田信熙	院長
松山赤十字病院	松山市文京地1番	桑島恵一	院長
		(前) 岩下明德	
		台丸祐	
国立療養所愛媛病院	温泉郡重信町横河原366	水野裕雄	院長
愛媛県大学医学部	温泉郡重信町大字志津川	福西亮	学長
		植田規史	
		杉田敦郎	
		田部井亮	教授
		大森高明	
		近藤万里	
		宮崎龍彦	
		宮本一郎	
愛媛労災病院	新居浜市南小松原町3-27	伊藤雅治	院長
		大西博三	
市立宇和島病院	宇和島市御殿町1-1	近藤俊文	院長
		栗原憲二	

今川玄一先生のご逝去を悼む

今川先生は平成2年11月11日66歳で胃癌の診断がなされてわずか半年の闘病生活で亡くなられました。

7月頃でしたか県立中央病院にご入院との報に接し、びっくりしてお見舞に参ったにもかかわらず、余りにも笑顔で迎えて戴き、その後ご自宅でご養生中のお電話でも、癌を患っている病人かと思えるほど、笑い声を交えての淡々としたお話し振りでした。

そんなことから私自身癌がこれほどまでに進行し、こんなに早く去られるとは夢にも思っておりませんでした。発見時すでに手術不能の状態であったと後に伺い、先生の生き様に感銘を受けました。

虫が知らせたのか、一度お見舞いを兼ねて先生にお会いしたいと思い、お電話致しますと昨夜から意識が朦朧としてこられたと伺い、急いでお見舞いに上ったときには、すでに意識は殆どなく、それでも私の手を握って下さったことが忘れられません。

先生とは私が松山に来て以来ご指導戴き、また大変話題に富み、愛媛県の医師や医療に関する歴史にご造詣が深く、さらにドイツのロマンに満ちたお話しは何時も楽しく拝聴したものでした。

本会は昭和39年以来今川先生、今は亡き山本 司先生と倉敷中央病院にご転任になり、ご定年後もご活躍の山本 寛先生と私の4人で始めましたが、単なる顕微鏡的診断のみならず、病理学的思考や世間一般のことなどを話しながら、月1回の検討会は思い出多い楽しい集いでした。一番若輩であった私は病院病理医とは如何にあるべきか、を身を持って教えて戴きました。

すでに山本 司先生が、さらにこの度今川玄一先生も去られ、山本 寛先生は松山を離れ、現役を引退された今、当時の会員は私一人となり、すでに過去の人間になりつつあります。やがて訪れるであろう我身を思う時、今川先生や山本先生のように、淡々として己の死を迎えることができるでしょうか。

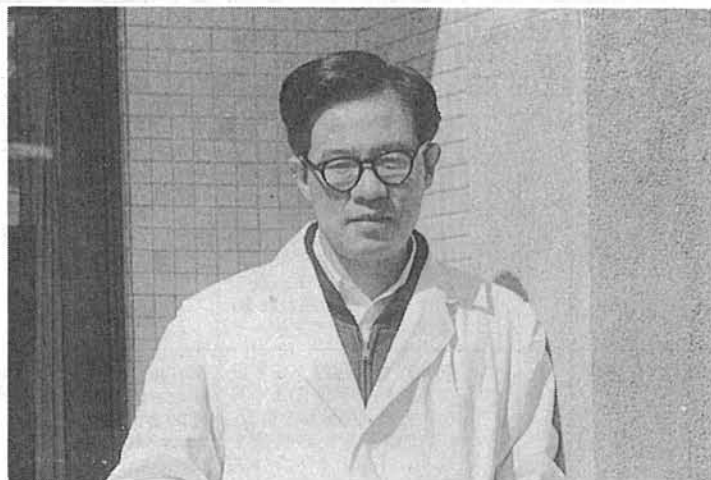
松山に住んで28年、当地でお世話になった方々が次々とこの世を去られ、寂しさを禁じえません。

ここに会員一同に代り先生の生前のご指導に感謝申し上げますとともに、ご遺徳を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

平成3年5月30日

森 脇 昭 介



故 今川玄一先生



故 山本 司先生



前愛媛県立中央病院病理 山本 寛先生

検 討 症 例 一 覧 表

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備 考
通算	年		性	年			
653	58-1	愛媛労災病院	女	42	右背部皮下腫瘍：昭和57年11月頃に気づき、同58年4月頃、下顎、舌下部にも出現、5×4cmの背部腫瘍は弾性軟	結節性筋膜炎あるいは増殖性筋膜炎：周囲との境界明瞭で比較的容易に摘出	
654	58-2	愛媛大中検病理	男	32	頸部リンパ節腫大：昭和58年6月頃、かぜ症状、扁桃腫大あり、某病院で悪性リンパ腫を疑われる、愛媛大耳鼻科で生検	悪性リンパ腫：濾胞型	
655	58-3	愛媛大1病理	女	60	側頭部皮下腫瘍：5年前に左乳癌で手術、3カ月前から側頭部腫瘍を自覚、CTで頭蓋骨への浸潤を認め、手術、5×5cm大	Malignant fibrous histiocytoma, giant cell typeあるいはangiosarcoma	83-735
656	58-4	松山赤十字病院	男	27	睾丸腫瘍：右陰囊腫大あり、鶏卵大で疼痛を有する	Malakoplakia of testis	83-862
657	58-5	松山赤十字病院	男	25	睾丸無痛性腫瘍：陰囊不快感、痔瘻があり臨床的には結核性病変を疑う、精索は連珠状	精子肉芽腫+perineural invasion、結節性精管炎	83-584
658	58-6	四国がんセンター	女	59	左肩甲下部腫瘍：昭和58年3月から出現、軟らかく、可動性で発赤あり	cutaneous lymphoma?	83-1174
659	58-7	四国がんセンター	女	60	皮膚腫瘍：5年前、左第1趾に黒子出現し、次第に増大し、腫瘍を形成、疼痛なし、易出血性	Malignant melanoma	83-1803
660	58-9	県立中央病院	女	45	外陰部腫瘍：1年前から気づく、12×8×8cm大、335g、手拳大、軟	Aggressive angiomyxoma of the vulva	83-227
661	58-10	県立中央病院	女	73	下腹部腫瘍：20年前子宮頸癌を指摘されたことあり。3カ月前から、超鶯卵大子宮筋腫が急速に増大する。8.8×8.2×7.6cm	Lipomyoma of uterus	82-2488
662	58-11	県立中央病院	女	62	右臀部の手拳大腫瘍：大臀から中臀筋の間にあり、境界明瞭、骨盤腔内に突出、黄色分葉状、16×16×4.5cm、415g	高分化型脂肪肉腫 一見脂肪腫様	83-1451
663	59-1	愛媛大1病理	女	60	右肺下葉腫瘍：昭和58年1月頃血痰あり、生検にて肉腫を疑い、右下葉切除	扁平上皮癌の肉腫様変化	84-2
664	59-2	愛媛大中検病理	男	56	右肺下葉腫瘍：昭和58年9月上気道感染性陰影、CEA上昇、7.0×6.0×5.0cm大	Pulmonary blastoma	83-2603
※665	59-3	四国がんセンター	男	75	右下葉腫瘍：CEA9.4ng/ml、AFP718ng/ml、15×12cm大	Pulmonary blastoma	剖1215

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備 考
通算	年		性	年			
※666	59-4	愛媛大2病理	男	7	眼瞼上腫瘍	骨外性Ewing tumor	
667	59-5	県立中央病院	女	63	下腹部腫瘍：腹痛、直腸、骨盤腔に11.6×9.0×7.0cm大の嚢胞性、充実性腫瘍	Adenosquamous carcinoma (endometrioid type?)	83-2820
668	59-6	県立中央病院	男	34	睾丸腫瘍：昭和58年2月に左睾丸腫瘍、7月に両側腫大、手拳大	Burkitt's lymphoma	83-2011
669	59-7	県立中央病院	男	66	右臀部腫瘍：全経過5年で7回摘出、7.5cm~0.5cm大の6個の腫瘍	Liposarcoma, mixed type	83-1917
670	59-8	松山赤十字病院	女	76	膵尾部腫瘍	Mucinous adenoma of pancreas	83-3344
671	59-9	松山赤十字病院	女	0	右第3指皮膚腫瘍：8×8mm大の半球状多発、再発する	Infantile digital fibromatosis	83-3713
672	59-10	松山赤十字病院	男	59	右三角筋腫瘍：昭和57年9月に気づき、同58年3月 9×6cmに腫大したため、摘出	Malignant Schwannoma with rhabdomyoblastic differentiation (malignant Triton tumor)	83-2197
673	59-11	松山赤十字病院	女		子宮筋腫	Adenomatoid tumor	84-1683
674	59-12	松山赤十字病院	男		十二指腸生検	Spherulosis?	84-1441
675	59-13	四国がんセンター	女	19	頬骨腫瘍	Fibromyxoma of the bone	84-665
676	59-14	県立中央病院				Verrucous carcinoma	84-1072
677	59-15	愛媛労災病院	男	60		Carcinoid?	
678	59-16	愛媛大2病理					
679	60-1	松山赤十字病院	女	34	妊娠、下腹部の拇指頭大腫瘍で漸次増大、7年前第1回帝王切開、第2回39週で帝王切開、そのとき採取	Decidual change of str-oma	84-3345
680	60-2	県立中央病院	女	66	膵腫瘍：全経過5年 昭和54年9月吐血で入院し、糖尿病を指摘される、右季肋部に腫瘍を触知、昭和58年再入院	上腹部腫瘍は700g、17×15.5×7.5cm充実性、Grimelius(+)ペプチドホルモンは陰性	剖84-44
681	60-3	県立中央病院	男	75	左膝関節腫瘍：69才時に生じ、大腿骨骨折・線状亀裂、仮骨形成	Synovial sarcoma 20.2×15.0×12.5cm大	84-1842
682	60-4	県立中央病院	男	21	前縦隔腫瘍：8.5×6.0cm	Thymus cyst	84-2347
683	60-5	愛媛大中検病理	女	61	左乳腺腫瘍：圧痛なく、異常分泌もない、10×8cm大、皮膚と癒着なし	Malignant lymphoma of breast	84-2533
684	60-6	医師会検査センター	男	55	下顎歯肉腫瘍 Pyogenic granuloma	血管にとみ出血性、多彩な腫瘍細胞、非上皮性、筋原性?	59-3526

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
685	60-7	四国がんセンター					
686	60-8	愛媛大1病理	男	14	右胸壁腫瘤：胸腔内に突出	Synovial sarcoma	
687	60-9	愛媛労災病院	男	61	左精索腫瘤：ツ反応陽性	結核精副睾丸炎	84-882
688	60-10	愛媛労災病院	女	64	胃幽門狭窄：多発潰瘍形成		85-006
689	60-11	松山赤十字病院	男				84-2818
690	60-12	松山赤十字病院	男			Dermatofibrosarcoma protuberans	84-2707
691	60-13	愛媛労災病院					84-577
692	60-14	愛媛労災病院				Angiolipoma	
693	60-15	愛媛大中検病理					84-1615
694	60-16	四国がんセンター	女	50	甲状腺腫瘍：10年前より頸部腫瘤に気付く、左葉に2.0×2.0cmの腫瘍	Follicular carcinoma??	84-1582
695	60-17	四国がんセンター	女	42	脾癌	脾癌、特殊型、巨細胞を混在	84-2902
696	60-18	四国がんセンター	男	13	腹部腫瘤：脾頭部の悪性リンパ腫疑い、昭和60年4月より腹痛	Lymphadenitis tuberculosa?	85-1030
697	60-19	四国がんセンター	女	64	前頭部腫瘤：1年前から右前頭部に0.8×0.6cm大の隆起性病変を見る	Basal cell carcinoma (adenoid type)	85-1038
698	60-20	松山赤十字病院	男	1	右側頭部腫瘍：10カ月前に生じ、増大する、皮膚科で生検、境界不明瞭、悪性として全摘	Myogenic tumor: PAS (+) alveolar structure (+), myoglobin (+)	85-970
699	60-21	松山赤十字病院	男	44	副睾丸炎+陰囊水腫：右陰囊腫瘍で透光性あり、充実部を認める	Adenomatoid tumor: benign reactive mesothelial proliferationとの鑑別が必要	84-4198
700	60-22	愛媛労災病院	男	50	手根骨破壊、尺骨に骨折出現	reactive or hamartoma	85-154
701	60-23	愛媛労災病院	男	58	口腔皮膚側粘膜下腫瘤、右肺上葉に異常陰影あり	転移性扁平上皮癌の肉腫様変化	85-258
702	60-24	愛媛労災病院	女	73	腹部腫瘤：3年前小腸腫瘍を摘出、腹腔に腫瘍多発、11×8cm大	Leiomyosarcomaの再発	85-196
※703	60-25	愛媛大中検病理	男	77	右肺中一下葉腫瘤	Pseudolymphoma	85-664
704	60-26	県立中央病院	女	44	閉塞性黄疸：総胆管拡張12×12mm、27才時、胆嚢摘出、急性肝炎と黄疸の既往あり、小結石あり	Adenocarcinoma tubulopapillare、乳頭状増殖と表在性進展	85-516

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
705	60-27	県立中央病院	女	50	右乳癌：皮膚および胸壁と癒着、リンパ節転移あり	Adenosquamous carcinoma	85-824
706	60-28	県立中央病院	女	58	子宮腫瘍：6カ月前に正常分娩、6.8×6.5×2.8cm大の内腔に突出する暗赤色、出血性腫瘍、ゴナビス50国際単位	Placental site trophoblastic tumor?	85-880
※707	60-29	愛媛大中検病理	男	17	肺の腫瘍様病変	Pseudolymphoma, lymphomatoid granulomaの範疇	
708	60-30	四国がんセンター	女	61	左扁桃腫大、両側頸部リンパ節腫大、悪性リンパ腫疑い	扁桃：lymphfollicular hyperplasia 頸部リンパ節：Castleman's lymphoma	85-1065 85-957
709	60-31	四国がんセンター	男	67	肺癌疑い：右腋窩リンパ節腫大、3.5×1.3cm、CTにて縦隔リンパ節の腫大もある	Reactive follicular hyperplasia	85-1041
710	60-32	松山赤十字病院	女	54	卵巣腫瘍：10cm大の嚢胞性腫瘍、歯牙あり、一部に充実性部分をみる	成熟奇形腫：前立腺様組織も見られる。	85-2551
711	60-33	松山赤十字病院	女	62	膀胱腫瘍：後壁に基部を持った乳頭状増殖、2.5×2.0cm大	Mesonephric carcinoma +cystic cystitis	85-1508
712	60-34	愛媛労災病院	男	60	左関節部腫瘍：3年前に打撲	Granuloma pyogenicum	85-603
713	60-35	愛媛労災病院	女	60	頭蓋骨のびまん性肥厚と顔面腫脹、前頭骨より採取	Fibrous dysplasia	85-515
714	60-36	愛媛大1病理	男	37	9カ月前より上肢知覚麻痺、CTで右半球に異常、右前頭葉にlow density area(+)	Encephalitis japonica	
715	60-37	愛媛大1病理	男	69	腭頭部腫瘍：昭和60年5月手術	Pseudosarcomatous carcinoma	
716	60-38	県立中央病院	男	5	左足の外側部のpigmented tumor	Angiokeratoma + angiolipoma	85-1580
717	60-39	県立中央病院	男	41	左肩甲部腫瘍：1年前に小結節に気付く、最近、5cm大に増大、弾性軟	Dermatofibrosarcoma protuberans	85-1220
718	60-40	四国がんセンター	女	9	腹部腫瘍：貧血、発熱のため入院。ツ反応14×13mm、血沈163/175、開腹すると腹腔リンパ節腫大、3.0×3.0cm	Castleman's lymphoma, plasma cell type	85-1976
719	60-41	四国がんセンター	男	51	Non-Hodgkin lymphomaとAML、右睪丸腫瘍	Chloroma	85-1948
720	60-42	愛媛大2病理	女	70	食道・甲状軟骨後壁腫瘍：食道粘膜を含めて切除	悪性顆粒細胞腫	

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
721	60-43	愛媛大中検病理	女	60	肺腫瘍：昭和57年1月右肺中下葉切除、昭和60年6月左肺に4.5×4.0×2.0cmの限局性腫瘍出現	Localized amyloidosis with pseudolymphoma	82-170 85-1044
722	60-44	県立中央病院	男	66	上腹部膨満感あり、進行胃癌と糖尿病で加療中	Malignant lymphoma, diffuse large cell type	85-1389
723	60-45	県立中央病院	男	66	鼻出血、中鼻道に腫瘍をみ、表面は平滑、篩骨洞に浸潤性充満、放治50 Gy。B-J蛋白陰性、総蛋白8.2 g/dl、A/G=1.1	Isolated plasmacytoma	85-2856
724	60-46	医師会検査センター	女		左下腿腓腹筋の中の無痛性腫瘍	Epitheloid sarcoma	60-2754
725	60-47	四国がんセンター	女	42	縦隔腫瘍	Thymic carcinoid	85-3326
726	60-48	愛媛大1病理	女	43	外陰部腫瘍：バルトリン腺の部位	Angioleiomyoma	85-558
727	60-49	愛媛大1病理	男	81	腋窩腫瘍：昭和60年初めより腫大、5×4×1.5 cm	Non-Hodgkin's lymphoma	
728	60-50	愛媛大1病理	女	47	右下腿部腫瘍：10年前から腫瘍を触知、軟、多結節性、7×4×4 cm	Trichogenic trichoepithelioma, multiple desmoplastic tricho-epithelioma	85-3706
729	60-51	愛媛大1病理					
730	60-52	四国がんセンター	女	33	子宮筋腫	Endometrial stromal nodule	84-1029
731	60-53	四国がんセンター	女	74	後腹膜腫瘍	卵巣中胚葉性混合腫瘍	剖1446
732	61-1	松山赤十字病院	男	60	後頭部腫瘍：2-3年前より出現	Nodular hidradenoma	85-4900
733	61-2	松山赤十字病院	女	79	右卵巣腫瘍：多嚢胞性10×6 cm大、透明な粘稠液を容れる	Mucinous cystadenoma +struma ovarii	85-4583
734	61-3	松山赤十字病院	男	2	肝脾腫：脾1950 g、黄白色	Gaucher's disease、貧血性梗塞、リンパ濾胞不明瞭	86-106
735	61-4	愛媛大1病理		33	顎下部腫瘍：200 g、6回再発	Spindle cell sarcoma	76-86
736	61-5	愛媛大1病理	女	56	子宮腫瘍：52才子宮頸癌IIb、放治60Gy、Follow up中に子宮腫大があり、両側肺・脳転移を認める	Squamous cell carcinoma with sarcomatous change	
737	61-6	愛媛大2病理	女	40	右卵巣腫瘍		
738	61-7	県立中央病院	女	57	十二指腸粘膜下腫瘍：石灰化像あり、2×1 cm	Epitheloid leiomyoma (leiomyoblastoma)	86-180
739	61-8	県立中央病院	女	56	検診にて肺異常陰影を指摘される	Bronchial carcinoid	86-205

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備 考
通算	年		性	年			
740	61-9	四国がんセンター	女	74	後腹膜腫瘍	卵巣中胚葉混合腫瘍	剖1446
741	61-10	四国がんセンター	男	63	右頸部腫瘍：(2.0×1.5cm)	MFH?	86-207
742	61-11	愛媛大1病理	男	45	頸部腫瘍：2年前chronic lymphadenitisの診断、左頸部リンパ節摘出	Immunoblastic lymphadenopathy	
743	61-12	愛媛大1病理	女	65	大脳半球腫瘍	脳原発の悪性リンパ腫	
744	61-13	愛媛大2病理	男	76	肝血管腫：肝4383g	Leiomyoblastoma?	剖86-24
745	61-14	四国がんセンター	男	10	左臀部腫瘍：石灰化や化骨あり	Nodular myositis	85-3020
746	61-15	四国がんセンター	男	69	膀胱腫瘍：7×6cm、隆起性	中胚葉性混合腫瘍？	85-2076
747	61-16	県立中央病院	女	58	肝左葉S4境界明瞭な腫瘍、7.5×5.4cm	Angiomyolipoma	85-787
748	61-17	松山赤十字病院	男	84	左球結膜腫瘍：10年前に気付く	Sebaceous cornea	86-1354
749	61-18	松山赤十字病院	女	15	視交叉部腫瘍：昭和53年手術、網膜芽細胞腫	Ganglioglioma, grade I	86-1706
750	61-19	松山赤十字病院	男	50	小腸腫瘍：イレウスで発症、回腸末端から140cmに8×7cmの腫瘍	Malignant lymphoma	84-207
751	61-20	松山赤十字病院	女	37	乳腺腫瘍：2.5×1.5cm大	Adenolipoma	86-652
752	61-21	愛媛労災病院	女	39	小脳腫瘍：硬膜Sudan III(+)	Hemangioblastoma?, meningioma	86-206
753	61-22	愛媛労災病院	女	68	前頭頂骨に金槌があたり、陥没骨折、皮下との関係はない	Angiosarcoma?, granuloma	86-344
754	61-23	県立中央病院	男	33	右大腿内側疼痛性腫瘍：7カ月後生検	Spindle cell sarcoma	85-2846
755	61-24	県立中央病院			内転筋内腫瘍：8.3×6.3×5.3cm	Synovial sarcoma	85-2598
756	61-25	医師会検査センター	男	23	直腸ポリープ、Smm大	Carcinoid	86-3707
757	61-26	松山赤十字病院	女	56	前縦隔腫瘍：昭和59年5月人間ドックで異常陰影を指摘される、胸腺と連続、7×6×6cm大	Thymic cyst	86-3245
758	61-27	松山赤十字病院	男	66	肺びまん性結節：昭和61年5月閉塞性黄疸、脾頭部に手拳大腫瘍あり、Virchow転移あり	Pulmonary adenomatosis	86-2571
759	61-28	松山赤十字病院	女	57	右環指腫瘍：環指皮下の腫瘍、5年前に気付く、1.2×1.0×1.0cm大	Nerve sheath myxoma (benign myxoid tumor of nerve sheath)	86-2365

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備 考
通算	年		性	年			
760	61-29	医師会検査 センター	男	37	右肩部腫瘍：半球状突出指頭大、硬い、2-3年来少しづつ増大	Pigmented dermatofibrosarcoma protuberans	86-2050
761	61-30	県立中央病院	男	64	腓尾部腫瘍：嚢胞腺癌疑い、CEA上昇	Mucinous cystadenoma, borderline lesion	86-1337
762	61-31	県立中央病院	女	44	腓嚢胞：半年前より上腹部腫瘍に気付く、972g、15.5×12.5×8.8cm大、多房性、ERCPにて腓管末端部不規則嚢胞状に拡張	Cystic adenoma 若年者、女性・体・尾部に多い、悪性化が強い	86-1554
763	61-32	愛媛労災病院					86-206
764	61-33	愛媛労災病院	女	34	Parasellar tumor：視神経の外側より中頭蓋窩から斜台後方に伸展、3×3×2cm	Chordoma PAS+, S-100+	86-450
765	61-34	四国がん センター	男	18	耳下腺腫瘍：約3年前より気付き、3カ月前から急速に増大、顔面神経を巻き込む	Mucoepidermoid carcinoma	86-2313
766	61-35	松山赤十字病院	女	56	尾骨腫瘍：昭和60年8月、尾骨部の痛みあり、同61年2月、同部の腫瘍に気付く、尾骨の破壊あり	Chordoma	86-3807 86-4141
767	61-36	松山赤十字病院	女	65	右卵巢悪性腫瘍：昭和61年9月下腹部に11.0cm大の腫瘍をCTで認める、嚢胞部と充実部が混在し、悪性を疑う	Thecoma with cystic degeneration	86-4261
768	61-37	松山赤十字病院	男	83	左前腕腫瘍：昭和60年2月に同部の腫瘍摘出を受ける、その後、4回再発	Liposarcoma, pleomorphic type	86-3443
769	61-38	松山赤十字病院	男	74	篩骨洞内乳頭腫再発：中鼻道充滿、眼窩下部にも波及	Malignant change of inverted papilloma	86-4363
770	61-39	県立中央病院	男	46	右副腎腫瘍、肝転移性腫瘍。尿中ノルアドレナリン2-2.3倍、DOPAは1.4-1.5倍	Pheochromocytoma	86-2885
771	61-40	愛媛労災病院	男	39	肝腫瘍：腹部不快感、背部痛、右葉に多房性嚢胞形成		89-916 86-916
772	62-1	四国がん センター	男	66	進行胃癌	分化型管状腺癌	86-2883 87-2885
773	62-2	四国がん センター	女	56	右歯肉腫瘍	Ewing's sarcoma?	86-757
774	62-3	愛媛大2病理	女	48	卵巢、子宮、頭部皮下腫瘍：頭皮には隆起性腫瘍形成	子宮：Endometrial stromal tumor 頭皮：Leiomyosarcoma?	62-1171 62-1345
775	62-4	愛媛大2病理	男	89	前立腺癌	高分化+低分化腺癌	62-1069

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
776	62-5	県立中央病院			左鼻腔腫瘍：Sphenoidal meningiomaで12年前に手術、6年、12年後局所再発、頭蓋内、眼窩、側頭部に出現	Invasive meningioma, malignant	86-3080
777	62-2	県立中央病院	男	31	腹痛、イレウス症状あり、3カ月後開腹手術、腹水あり、回盲部から120cm口側に腫瘤あり	アニサキス	87-718
※778	62-7	県立中央病院	女	62	大腸ポリポシス：18個、数mm-35mm大、20年前胃癌で手術、ネフローゼ症候群あり	Juvenile polyposis + adenoma	87-622
779	62-8	愛媛大中検病理	男	67	右副腎腫瘍：昭和61年6月心窩部不快感、各種ホルモン異常なし、5.0×3.5×2.0cm、被膜を有する	Myxomatous neurofibroma	86-1956
780	62-9	愛媛大中検病理			眼窩腫瘍	Malignant lymphoma	87-359
781	62-10	四国がんセンター	女	54	子宮筋腫：子宮全体にびまん性に浸潤する悪性腫瘍	Undifferentiated carcinoma	87-1042
782	62-11	四国がんセンター	女	59	子宮体癌：性器出血あり、生検にてendometrioid carcinomaと診断	Lipid producing carcinoma	86-3049
783	62-12	愛媛大1病理	女	30	副腎腫瘍：全身倦怠感で入院、ホルモン異常なし	Myelolipoma	86-1093
784	62-13	愛媛大1病理	女	80	右手指腫瘤	Foreign body granuloma	86-989
785	62-14	松山赤十字病院	女	75	右卵巢腫瘍+子宮体癌、子宮筋腫：エストロゲン、プロゲステロン、CA19-9、CA125上昇、卵巢8.5×7.0×6.0cm大	Granulosa cell tumor + endometrial carcinoma	87-1485
786	62-15	松山赤十字病院	男	57	陰茎腫瘍：昭和59年頃より排尿困難、陰茎先端の包皮の腫瘍に気付く、2.0×2.0×1.9cm大	Verrucous carcinoma	86-5186
※787	62-16	四国がんセンター	男	60	縦隔腫瘍：気管右後方の50×35mmの腫瘍、奇静脈を巻き込み、食道に癒着、右肺とは剝離可能	胸腺癌あるいは germ cell tumor、赤黄色、弾性軟、薄い被膜にておおわれる、分葉状で一部に嚢胞を形成	85-3029
788	62-17	愛媛労災病院	男	18	左大腿部腫瘍A-V malformation：腫瘍は漸次増大、弾性軟で10×7×6cm剖面で黄白色、血管に富む	Intramuscular lipoma, angio-lipoma, hamartoma, A-V malformation	87-577
789	62-18	愛媛労災病院	男	69	空腸腫瘍：Treitz靱帯の5cm肛門側に6×9cmの腫瘍	平滑筋肉腫、EMA(+), PAS(+), Desmin(-), Grimelius(-), PTAH(-)	87-507

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
790	62-19	県立中央病院	男	16	結節性硬化症: tuberous sclerosis, 精神發育遲滞、1週前より頭痛、嘔吐、顔面に小腫瘤、爪下に線維腫、腎は囊胞腎、視床、視床下部に腫瘍	Tuberous sclerosis, cerebrum, angiofibroma (sebaceous adenoma) of skin, subungual fibroma, astrocytoma?	87-1345
791	62-20	県立中央病院	男	64	胃粘膜下腫瘍	扁平上皮癌、食道あるいは胃噴門原発	87-1661
792	62-21	県立中央病院	女	62	食道ポリープ: 黄色調、山田三型	Granular cell tumor of esophagus, PAS(+)	86-2479
793	62-22	愛媛大2病理	女	71	甲状腺腫瘍: 14年間で徐々に増大、大きさ8×7.5×3cmで縦隔内に侵入、リンパ節の腫大はない、甲状腺機能検査はまだ	慢性甲状腺炎、granulomatous thyroiditis, struma lymphomatosa, Riedel's struma	62-2778 (成人病セ)
※794	63-1	四国がんセンター	男	59	胃癌切除材料における胃粘膜内印環細胞様細胞の集族	固有胃腺上皮の変性。PAS-AB染色では印環細胞や幽門腺細胞とは異なる態度を示す	87-3897
795	63-2	四国がんセンター	男	42	後腹膜腫瘍: 左後腹膜、脾と腎の間に5cmの腫瘍、Adrenalin, aldosteron, VAMは正常、CEA, AFP正常、免疫グロブリンも正常範囲	Castleman's lymphoma, hyaline vascular type, 部位がまれ	87-4045
796	63-3	愛媛労災病院	男	55	眼窩内腫瘍: 1カ月前より眼瞼に腫瘍出現、漸次増大	Pseudotumor of orbita, Malignant lymphomaとの鑑別	87-1304
797	63-4	県立中央病院	女	69	左大腿腫瘍: 10年前より左大腿屈側に腫瘍があり、次第に増大、2.1×1.9×1.4cm	Spindle cell lipoma?, neurofibromaのvariantか	87-2628
798	63-5	県立中央病院	男	43	右肩甲部皮下腫瘍: 約1年間で拇指頭大から5×3cmに増大、弾性硬、摘除後に再発	Dermatofibrosarcoma protuberans?	87-2665
799	63-6	愛媛労災病院	女	36	SLEの胃病変: 体下部大弯の小発赤	胃形質細胞腫様の細胞の集族、好酸性胞体内にRussel's body?, グロブリンの貪食か	88-19
800	63-7	愛媛労災病院	男	61	脳梗塞: 血管造影にて総頸動脈に80%の狭窄、carotid endarterectomy施行	内頸動脈の膜様狭窄	87-909
801	63-8	松山赤十字病院	女	85	外耳道腫瘍: 10年以上前から出現、左外耳道に弾性軟、充実性、表面平滑1.2×0.8×1cm	Ceruminous adenoma 褐色顆粒を何と考えるか	87-464
802	63-9	愛媛大1病理	男	80	左耳介腫瘍: 2-3年前より徐々に増大、軟で潰瘍形成し、疼痛が強い	Pseudoglandular prickle cell carcinoma	87-716

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
803	63-10	愛媛大2病理	女	57	子宮内膜腫瘍：ポリープ状増殖	Mesodermal mixed tumor: 腺癌組織、軟骨、横紋筋組織など多彩	87-1324
804	63-11	愛媛労災病院	男	81	急性虫垂炎	Goblet cell carcinoid or poorly diff. adenocarcinoma	88-280
※805	63-12	四国がんセンター	女	42	外陰潰瘍：外陰部から腔にかけて発赤、肥厚し、一部に潰瘍、HSV-1およびHSV-2抗体価の上昇	Warty dyskeratosis? Pemphigus	88-310
806	63-13	四国がんセンター	男	61	前立腺癌：排尿困難にて発症	低分化腺癌Grimelius(-), PAS focally positive, PTAH(-)	88-816
807	63-14	県立中央病院	男	42	左篩骨洞腫瘍：鼻出血にて発症、鼻腔内、上顎洞に浸潤	Olfactory neuroblastoma or undifferentiated carcinoma, meningeal sarcoma	88-785
808	63-15	県立中央病院	男	49	Zollinger-Ellison's syndrome: 膵体尾部、胃全摘施行、術後血清ガストリンは低下	Islet cell hyperplasia of pancreas? 胃にはG-cellの過形成はないか。	88-455
809	63-16	松山赤十字病院	男	64	前立腺肥大症：排尿困難	悪性黒色腫：尿道、Masson-trichrom, 漂白試験	87-1208
810	63-17	医師会検査センター	女		左下腿のくぼみ	変性脂肪組織	63-3033
811	63-17	四国がんセンター	女	23	卵巣腫瘍：CA-125、AFP、TPA、CA19-9は正常範囲内	Sclerosing stromal tumor、多嚢胞性腫瘍、Fibrothecoma, massive edemaとの鑑別、若年者、血管豊富、限局性浮腫、嚢胞性、heterogeneity	16082 (他院)
812	63-18	医師会検査センター	女	56	頸部軟部腫瘍：3-4年前から頸部に0.5cm位のイボ状の腫瘍あり、皮膚と径4mmの茎で連続	Mixed tumor?, neural crest origin tumor?, melanin(+), Grimelius(+), fat(+)	63-2010
813	63-19	市立宇和島病院	女	50	甲状腺腫瘍：大きさ2cmで被膜を有する、リンパ節腫大はない	濾胞性腺癌、Atypical adenomaとの鑑別が必要	88-1860
814	63-20	市立宇和島病院	男	28	膀胱腫瘍：2cm大で境界明瞭、粘膜下から筋層にかけて存在	Paraganglioma of urinary bladder	88-1890
815	63-21	県立中央病院	男	62	胸腺腫、赤芽球癆：末梢血 T-cellの増加	胸腺腫、胸腺は13×9×6.5cm分葉状	88-815
816	63-22	県立中央病院	女	32	左後頭葉腫瘍：てんかん発作にて発症	悪性リンパ腫、腫瘍は出血、壊死が強く、嚢胞性変化、灰白色で境界は比較的明瞭 Gliomaとの鑑別	88-1753

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
817	63-23	愛媛大中検病理	男		胃癌	胃のhepatoid carcinoma, 肝様腺癌 Albumin(+), AAT(+), ACT(+), protrombin(+), CEA(-), HCG(-), ferritin(-)	
818	1-1	市立宇和島病院	男	67	下咽頭腫瘍: 3カ月前より嚥下困難、下咽頭左側壁に大きさ2cmの隆起性病変、血清IgG2080、IgA610、IgE3950単位	IBL-Like T-cell lymphoma, helper-inducer type, pale cellsが特徴的、LCA(+), UCHL-1(+), Mx-Pan B(-)	88-1587
※819	1-2	市立宇和島病院	女	9 カ月	卵巣腫瘍: 1カ月前より腹部膨満出現、乳房腫大あり、CTにて左側腹腔内に多房性腫瘍、CA125, E2上昇、手術時、腫瘍は卵巣にあり、大きさ10cm球形、多房性、一部充実性、嚢胞内には出血や壊死なし	Juvenile granulosa cell tumor、典型例に比べ、黄体化が少ない	88-2005
820	1-3	愛媛労災病院	男	52	右第3趾外骨腫: 約2年前より、右第3趾の膨隆に気付く、徐々に増大し、歩行時に疼痛出現。腫瘍は骨皮質から比較的簡単に切除され、骨髄質との関連がなかった、大きさ2.8×2.2×1.0cm	Osteochondroma(exostosis) or periosteal chondroma いずれの診断でも組織像とレ線所見が符合しない	89-61
821	1-4	愛媛労災病院	男	13	下顎部腫瘍: 2年前に転倒して同部に負傷、1年前より下顎部に腫瘍出現、気になり摘出を受ける。腫瘍は皮下にあり、約0.5cm、剖面では黄色調	Juvenile xanthogranuloma, benign histiocytoma	89-45 9945
822	1-5	松山赤十字病院	女	67	左卵巣ないし卵管癌: 腹部膨満と体重減少を主訴、小児頭大の下腹部腫瘍と腹水貯溜を指摘された、CA 125 13804 unit	Malignant Mullerian mixed tumor卵管原発、間葉系成分としては軟骨卵管原発はきわめて珍しい	88-1927
823	1-6	松山赤十字病院	女	55	右肘部腫瘍(皮下神経鞘腫疑い): 数カ月前、右肘外側の腫瘍に気付く、大きさ26×23×19mm、白色調、分葉状、結節状、充実性、一部、血管、皮神経と連続	Monomorphic fibrous synovial sarcoma	88-6379
824	1-7	愛媛大2病理	女	42	子宮筋腫: 鉄欠乏性貧血の精査で来院、子宮筋腫の診断で手術、内腔に突出し大きさ35×30×25mm	Malignant Mullerian mixed tumor, or Mullerian adenosarcoma, Endometrial stromal sarcoma、上皮成分は腫瘍性か?	88-911

189-2-4

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
825	1-8	愛媛大1病理	男	3	肝不全、腎不全：母親は26才でITPを発症、妊娠中もpredonin服用、患児は在胎34週、2410gで出生、全身浮腫、腹部膨満、血清総蛋白2.8g/dl、高度貧血、腹水貯溜、蛋白尿、腎腫大	Congenital nephrotic syndrome, 胎児性肝炎後の肝線維化	88-40
※826	1-9	愛媛大1病理	男	56	腸間膜腫瘍：昭和62年1月早期胃癌にて胃全摘術、昭和63年8月頃より、腹部にelastic hardな腫瘍(4×6cm)を指摘され、摘出術を受ける、腫瘍は腸間膜に発生し、弾性硬	Intraabdominal desmoid	88-2400
827	1-10	四国がんセンター	女	72	悪性リンパ腫：右そけい部リンパ節腫大で発症し、生検にて悪性リンパ腫と診断、このときすでに右水腎症と骨盤内腫瘍を指摘、剖検にて腫瘍は骨盤内に多結節状に増生し右尿管を巻き込む、後腹膜リンパ節腫大	Round cell sarcomaの鑑別、EMA(+), LCA(-), UCHL-1(-), Mx-panB(-), 銀染色ではalveolar pattern	剖1612
828	1-11	県立中央病院	男	35	眼窩内腫瘍：1984年4月右肺下葉の腫瘍で手術(慢性肉芽性炎症)、1985年蓄膿症手術、1988年9月左眼球突出、筋骨同腫瘍と眼窩内腫瘍を摘出	Inflammatory pseudotumor of orbita? Wegener's granulomatosis? 血管炎の所見が強い	89-127
829	1-12	県立中央病院	女	19	Fibrous dysplasia of rib: 最近、偶然に検診の胸部X線にて右第8肋骨のlucent lesionを指摘された、切除材料は4.2×2.4×1.1cm、骨髄内に灰白色の部と嚢胞形成	Desmoplastic fibroma or fibrous dysplasia, aneurysmal bone cystにしては嚢胞状変化や hemosiderinに乏しい	88-3235
830	1-13	県立中央病院	女	57	子宮肉腫：性器不正出血を主訴とし、内膜生検にてcarcinosarcomaと診断、子宮体部の前側壁に発生したpolypoid lesion。5.8×3.4×3.4cm、灰褐色～灰黄白色、弾性硬	Malignant Mullerian mixed tumor, Giant bizarre cellのhistogenesis? 横紋筋肉腫細胞?	88-2660
831	1-14	愛媛労災病院	男	74	甲状腺腫瘍：S58年3月右葉切除、組織診断：髓外形質細胞腫(IgA, κ)その後、経過順調であったが、平成元年4月甲状腺左葉下極に結節状腫瘍出現、再発の可能性あり、切除	Malignant lymphoma, lymphoplasmacytoid (IgG, κ)前回の腫瘍と一元的に解釈できるか、それとも異時性に発生したのか	89-552

189-6-17

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
832	1-15	愛媛第中検病理	女	29	1988.12.1.より右側腹部痛と発熱あり、5日後激痛となるも、2-3日で和らぐ、本年1月と2月に頻尿、残尿感などの膀胱炎症状出現、超音波診断、CTにて右副腎に一致して低吸収域あり	右副腎出血性偽嚢胞、出血の原因はいかに、右副腎動脈の奇形は、R/O神経鞘腫などの腫瘍の二次変化、腫瘍の退縮、敗血症、DIC、外傷、静脈血栓症など	89-620
833	1-16	県立中央病院	男	64	転移性脊椎腫瘍：来院5日前より、両下肢の疼痛、知覚傷害、運動傷害出現、L3, 4の棘突起と椎弓は破壊され、硬膜外腫瘍は充満し、背側より硬膜を圧迫	横紋筋肉腫？40才以上は稀、むしろ神経根由来のMalignant Triton tumorを考えるべきか	89-1388
834	1-17	県立中央病院	女	65	第5胸椎転移性腫瘍：1988春頃より、両下肢の筋力低下、歩行傷害。腰痛あり、MyelographyにてTh4-6の硬膜外腔に後方より腫瘍の増殖あり、椎弓切除後、半月後に右鎖骨上リンパ節腫大し、生検	Hodgkin' diseaseか？節外性であり、このように線維化の強いものがあるか	89-1007 89-1282 スライド供覧のみ
835	1-18	県立中央病院	男	68	後腹膜腫瘍：6年前より右陰嚢内腫瘍あり、1988.6.6.腫瘍摘出、8×7cm白色硬、線維組織内に骨組織が島状に形成される。1989.6.2.右下腹部・後腹膜に腫瘍出現	Intraabdominal fibromatosis？顕著な化骨はまれ、R/O Sclerosing liposarcoma, fibrosarcoma	89-1429
836	1-19	松山赤十字病院	女	14	気管支腫瘍：血痰を主訴とした入院、気管支鏡で左B6入口部に腫瘍が占拠	Granular cell tumor	88-2520
837	1-20	松山赤十字病院	男	62	右肺B2肺癌：左舌区入口部ポリープ状腫瘍	Granular cell tumor	89-3049
838	1-21	四国がんセンター	男	69	食道癌：約2年前より軽い嚥下困難あり、Upper G-1にてIm-Eiに隆起型の腫瘍を指摘	Basal cell carcinoma of esophagus、食道基底細胞の樹枝状、吻合状、ループ状増殖からなる、間質にはAB染色陽性、全国食道癌登録では全切除数の0.11%	89-1271
839	1-22	四国がんセンター	男	44	食道癌：約半年前より食物摂取時、背部にしみる感じあり、CEA7.8ng/ml(<5ng/ml)中部食道後壁に扁平な隆起性病変を指摘	Mucoepidermoid carcinoma of esophagus、腺構造にCEA陽性、全国食道癌登録では全切除数の0.15%	88-4380
840	1-23	愛媛大2病理	男	47	第2腰椎病的骨折：20才頃、第2腰椎の異常陰影を指摘される、1988年10月頃より、腰痛増強、第2腰椎の病的骨折を認められる、椎体切除施行	Alveolar structure. NSE(+), S-100(+), EMA(-), Cytokeratin(-), Keratin(-), Desmin(-), PAS(-)転移性癌か？	89-560

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
841	1-24	愛媛大1病理	女	78	膀胱腫瘍：腫瘍は膀胱頂部より有蓋性に内腔に突出、大きさ3×34.5cm断面では黄白色、充実性、周囲との境界は明瞭	Malignant mesenchymal tumor、上皮成分はない、間葉系成分として横紋筋肉腫、頰骨	89-166 116?
※842	1-25	愛媛大1病理	女	60	腹腔内腫瘍：腫瘍は直径10cmで大綱に被覆され、血管に富む	Epithelioid leiomyosarcoma	88-1419
843	1-26	市立宇和島病院	女	53	肺結核：34才時、肺結核、1989年3月咯血がつづくため、結核の診断で右肺上中葉切除、肉眼的に、右肺上中葉に含気に乏しい、小空洞を伴う病変をみる	肺 actinomycosis：病変部は慢性気管支肺炎の像でリンパ濾胞の形成が著しい、気管支内くうにはPAS、Grocott染色陽性の長かん菌群の集落(druse)を見る、問題点は二次的なもの？	89-956
89-10-21							
※844	1-27	市立宇和島病院	女	60	骨腫瘍：慢性腎不全にて血液透析、二次性副甲状腺機能低下症による骨異栄養症、左側第一中足骨の腫大に気づき、生検施行、放治で縮小、その後、左鼠径部リンパ節の腫大出現、化学療法開始後、脳出血にて死亡	悪性リンパ腫：large cell type, diffuse. B-cell lymphoma. Ig M一部 positive. L26(+), Pan-B(+), UCHL-1(-)	88-2873 89-152
845	1-28	松山赤十字病院	女	63	右大腿部軟部腫瘍：摘出約3週間前に右大腿外側に拇指頭大の腫瘍に気付く、初診的に比べ、増大傾向があり、皮下に境界明瞭な充実性の4cm大の腫瘍がみられた、X-線で石灰化はない	増殖性筋膜炎：筋膜に垂直に羽毛状に血管が並ぶ、Ganglion-like cellが特徴的、臨床的には急激な増大が特徴的	89-3465
846	1-29	松山赤十字病院	女	54	右副鼻腔炎：5か月前より右鼻閉感あり、徐々に悪化、上顎骨の破壊像と鼻腔内に鼻茸様の脆い腫瘍の形成を見る	腺癌(intestinal type)：杯細胞や腸管の吸収上皮細胞を思わせる腸管型の腺癌、PAS(+)	89-4808
847	1-30	松山赤十字病院	男	25	急性虫垂炎：右下腹部痛で発症、上記診断で虫垂切除	Carcinoid(microglandular type)：虫垂には5mm大の小結節性病変あり、粘膜下織にAB染色陽性杯細胞を小数交える小型腺管の増生、Grimelius(+)	89-5008
848	1-31	愛媛大1病理	男	1	脳腫瘍：生後1才2カ月より歩行傷害あり、CTで脳腫瘍を指摘される、脳腫瘍は脳室内より発生し、脳室内腫瘍の疑いあり	Choroid plexus papilloma(malignant)：典型的なpapillomaに比して浮腫性の間質に乏しいが、ependymomaとは鑑別される、脳白質への浸潤は不明	88-2276

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
849	1-32	愛媛大1病理解	男	70	膀胱腫瘍：肉眼的血尿と頻尿にて精査、膀胱で頂部および頸部に腫瘤あり、内腔を占拠、CEA10.9 ng/ml、消化管の精査では胃に小型ポリープのみ、膀胱全摘施行	膀胱原発印環細胞癌：印環細胞や腸型の腺癌を交える、Urachus由来か	89-1771
850	1-33	県立中央病院	女	32	内膜下子宮筋腫、子宮筋腫分鏡：過多月経、貧血あり、子宮口より超拇指頭大の暗赤色腫瘤の突出あり、US・CTにて粘膜下筋腫と診断し、単純子宮全摘施行	Endolymphatic stromal myosis：子宮体内腔に突出する2.7×1.6cm大のポリープ病変と子宮筋層の腺筋腫様の肥厚をみる、細胞密度の増加と核分裂が目立つ	89-2437
851	1-34	県立中央病院	女	67	肺癌（左上葉）、縦隔腫瘍：既往歴に高グロブリン血症と慢性甲状腺炎、検診にて左肺の異常陰影を指摘、CTで左肺癌、右肺への転移、縦隔腫瘍と診断され、左上葉切除施行	Amyloid tumor：切除肺には左肺尖部に1.8cm以下の灰白色の硬い結節性病変の多発を見る、血管内皮下のamyloidの沈着を主体とするところや形質細胞肉芽腫様の部分の混在から成る	89-1386
852	1-35	県立中央病院	女	15	急性虫垂炎：右下腹部痛の出現と増強あり、上記診断で虫垂切除施行	壊死性血管炎：粘膜下織とsubserosaの血管炎とフィブリノイド変性あり、血管閉塞や弾性板の変性をみる、PN様の血管炎の像とみなされるが、好中球浸潤や中膜の変性は少ない	89-2642
853	1-36	愛媛大中検病理	男	49	Spinal tumor：1988.11.より左手、左肩の痛み出現、1989.6.CT、MRIなどにてC5,6の椎体より発生した腫瘍の診断で手術	軟骨腫(enchondroma)か肉腫か：2核の細胞や多少の異型性はみられるが、悪性とはいえない、R/O軟骨形成型髄膜腫、線学的に骨との関連は？	89-1460 89-1473
854	1-37	四国がんセンター	女	49	膵嚢胞腺癌：偶然右上腹部の腫瘤に気付く、CT、echoで膵頭部から膵鉤部に及ぶ内腔の不整な脳泡性病変を指摘、血清CA 19-9、CEA、elastase Iは正常範囲、膵頭十二指腸切除施行	Papillary cystic tumor of pancreas：厚い線維性被膜に被われ、中は出血壊死性で嚢胞状、腫瘍は立方状細胞の充実部と血管性間質を伴うリボン状配列部から成る、胞体はAAT陽性	89-2336
855	2-1	四国がんセンター	女	67	頸部腫瘍：6か月前に左頸部の腫瘤に気付く、漸次、増大するため受診	MFH, pleomorphic storiform type：左胸鎖乳突筋内拇指頭大肉様黄白色。多形腫瘍細胞が錯走、PAS(-), alpha-1 antichymotrypsin(+)	89-2201
856	2-2	市立宇和島病院	女	80	深在性真菌症：3か月前より左頬部に5cm径湿疹様病変あり、さらに1か月前から中央部に1cm大の隆起性病変が発生	Merkel tumor + SCC：表皮直下の充実性胞巣と周囲のBowen様 SCC、前者はkeratin(-), S-100, NSE(+)	89-1421

90-1-27

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
857	2-3	市立宇和島病院	女	19	脳室内腫瘍：6か月前より、悪心・嘔吐出現、脳CTで右側脳室内に腫瘍、腫瘍は易出血性	Ventricular neurocytoma: S-100, NSE(+), GFAP(-), rosette formation(+)	89-3349
858	2-4	市立宇和島病院	女	32	膵腫瘍：腫瘍は膵尾部の辺縁にあり、2.5cm大、球形で被膜を有し、剖面は充実性で一部列腺状嚢胞状	Solid and cystic tumor: 一部に海面状嚢胞形成、ACT(+), insulin. glucagon. somatostatin. Grimeliusはいずれも(-)	89-3375
859	2-5	松山赤十字病院	女	46	耳下腺腫瘍：2か月前より左耳下腺部の痛みと腫脹に気付く、大きさ2.5×1.5cm、弾性軟、中心部は膿瘍様	Oxyphilic adenoma: 分葉状で境界は不明瞭、好酸性胞体を持つ均一な腫瘍細胞	89-5654
860	2-6	松山赤十字病院	女	74	皮膚硬結：1年4か月前に下垂体腺腫の摘出術、約1年前より軽度の圧痛を伴う鶏卵大前後の紅斑が上下肢に出現、抹消結白血球7300、骨髄に異型細胞なし	Malignant angioendotheliomatosis(angiotrophic B-cell lymphoma): LCA(+), L26(+), Factor VIII(-)	89-5686
861	2-7	松山赤十字病院	女	10	急性虫垂炎：虫垂は穿孔し、尾部に1cm大の黄色腫瘍をみる	Classical carcinoid: Grimelius(+), Fontana(-)Masson(-)	89-7237
862	2-8	松山赤十字病院	男	25	左気管支腫瘍：左下葉気管支の腫瘍で大きさ2.5×2.2cm、#7、#10のリンパ節に転移あり	Central carcinoid: Grimelius(+), Fontana-Masson(-), リンパ節に転移	89-7187
863	2-9	愛媛大中検病理	女	0	左手掌腫瘍	Hamartoma(Fibrous hamartoma of infancy?): fiber, fat tissue, vessel(+)だが、mesenchymal cell nestがない	89-1653
864	2-10	愛媛大中検病理	男	42	下垂体腺腫	Invasive adenoma of pituitary gland: 細胞密度高く、核分裂多し、骨浸潤あり	89-2542
865	2-11	愛媛大1病理	女	62	外陰部腫瘍	Clear cell hydradenoma: PAS少数のみ陽性、周辺に浸潤するようにみえるが良性か	89-1552
866	2-12	愛媛労災病院	男	58	急性虫垂炎	Adenocarcinoid: 虫垂周辺まで浸潤、Grimelius. Masson-Fontanaは少数のみ陽性、腺癌か	89-1492
867	2-13	県立中央病院	女	70	子宮頸癌	子宮内膜にびまん性に広がる表層伸展型の子宮頸癌、大細胞性、非角化型、頸部ではI期	89-3231
868	2-14	県立中央病院	男	53	右肺腫瘍	Chondromatous hamartoma(central): 大型で7.9×6.7×6cm、S2から肺外性に増大する	89-2662

No. 通算 年	提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考	
		性	年				
869	2-15	県立中央病院	男	86	前頸部腫瘍：放治後再発を繰り返す	MFH(ordinary type) : 大振りのstoriform pattern(+), 鉄貧食像(+)	89-1962
190-5-12 870	2-16	四国がんセンター	女	22	Pentz-Jegher's syndrome, 子宮頸部腺癌：口唇、口腔、手拳、足底部に色素沈着、胃、小腸、結腸、直腸に多発性ポリプ、子宮頸部には低分化腺癌の合併あり	Peutz-Jegher's polyposis	90-296
871	2-17	四国がんセンター	女	38	後腹膜腫瘍：偶然下腹部の腫瘤に気付く、腹部CT検査にて後腹膜の嚢胞性腫瘍を指摘される	Schwannomaか：大きさ11×9×7.5cm、嚢胞性腫瘍で壁は黄白色軟の均一腫瘍、vimentin(+), desmin(-), S-100-bb(+), Leu7(-)	90-753、平滑筋肉腫との鑑別きわめて困難
872	2-18	松山赤十字病院	男	62	胃平滑筋肉腫：1年前より腹部腫瘤を自覚、精査にて胃体部大弯に13cm大の粘膜下腫瘍	Schwannoma of stomach: Lymphoid cuffingが特徴的、矢はず模様、固有筋層内に占拠	89-153
873	2-19	松山赤十字病院	男	66	Mucinosis follicularis: 2年前より額、顔面、頸部、項部、一部両肩、両手首に米粒大前後の淡白色丘疹が散在あるいは集簇	Lepromatous leprosy: 顔貌、頸部、手指に特徴的結節、Lepra-cell(+), 抗酸菌染色陽性	S90-434
874	2-20	松山赤十字病院	男	52	肺腫瘍：集団検診にて左肺下葉の腫瘤陰影指摘される、増大傾向あるため手術	So-called sclerosing hemangioma: 直径1.2cm大、境界明瞭	S90-875
875	2-21	松山赤十字病院	女	58	卵巣腫瘍：下腹部膨満感のため受診、手術前日破裂	Squamous cell carcinoma arising in mature cystic teratoma: 大きさ12cm嚢胞性、内容はオカラ様あるいはクリーム状で毛髪を混じる	S90-1180
876	2-22	市立宇和島病院	女	51	口蓋腫瘍：2年前左側軟口蓋の小腫瘍を自覚、徐々に増大	Mucoepidermoid tumor (WHO), clear cell predominant: 腫瘍はドーム状1.5cm大で表面潰瘍形成	90-237, 90-420
877	2-23	市立宇和島病院	女	41	髄膜腫：数年前より左側の視野狭窄あり、うっ血乳頭あり	Meningioma, microcystic variant or vacuolated: 腫瘍は右蝶形骨の髄膜に附着し、最大径5cm円盤状、脳実質との境界は明瞭、浮腫状で硬度はコンニャク様	90-588
878	2-24	市立宇和島病院	男	81	腎腫瘍：心疾患で入院中たまたま超音波検査で右腎腫瘍を発見される	Oncocytoma: 腫瘍は6cm大、剖面褐色、充実性で一部粗な部分と血液量の多い部分を見る	90-758

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
879	2-25	県立中央病院	男	61	右肺腫瘍：胸部X-Pで異常陰影を指摘され、右肺中下葉切除	悪性混合性腫瘍（気管支腺由来）か：腫瘍は5.3×3.5cm大、気管支壁に沿ってタコ足状に増生、灰白色充実性、きわめて稀、命名になお検討の余地あり	90-9
880	2-26	県立中央病院	男	55	腹部平滑筋肉腫+肝細胞癌：大酒家、AFP2700ng/ml以上、CEA軽度上昇、CTにて肝左葉と後腹膜に腫瘍を認める	脂肪肉腫：腸間膜腫瘍は28×25.2×7.3cm、2680g、淡褐色、充実性、剖面は粘液腫状で境界明瞭。腹膜播種性病変あり、肝左葉には6.4×6.5cm大の肝細胞癌を認める	90-505
881	2-27	県立中央病院	男	52	甲状腺癌：甲状腺右葉に石灰化を伴う腫瘍	髓様癌：2.2×1.8×2cm。灰褐色充実性、気管前リンパ節に転移、間質のamyloid沈着あり、Grimelius(++)、Calcitoninは未検	90-950
882	2-28	愛媛大2病理	男	60	左眼窩内腫瘍：約3年前左眼瞼部を打撲、以後、眼窩内に違和感	偽リンパ腫より悪性リンパ腫を考えたい、免疫組織化学は検索中	
883	2-30	愛媛大2病理	男	65	胃粘膜下腫瘍：腹部CTで嚢胞を伴う左上腹部腫瘍、血管造影では脾動脈がfeeding artery	Leiomyosarcoma：部分的に見られる上皮様の配列が特異、Leiomyoblastomaとするには筋原性であることがはっきりしている	90-9
884	2-31	愛媛大1病理	女	76	右大腿腫瘍：レ線像では骨端から骨幹端にかけてosteolytic lesion	MFH：腫瘍は寒天硬で充実性、黄白色ないし黄褐色。腫瘍内の骨形成は反応性か腫瘍性か、VMT(+), AAT(+), ACT(+)	90-504
885	2-32	愛媛大1病理	女	55	頭部皮下ないし硬膜下腫瘍：頭部打撲時に皮下腫瘍に気付き、徐々に増大	悪性リンパ腫：diffuse large、その後、頸部と縦隔のリンパ節腫大がみつかると、免疫グロブリン陰性、T?, B? Lysozyme(+), AAT(+), S-100(+)	90-740
886	2-33	愛媛大中検病理	女	65	腸間膜腫瘍：胸水にて入院、CTで胸骨後面に腫瘍(+), 腹腔鏡検査で1cm以下の浮腫状結節が散在	中皮腫の疑いしかし、良悪性はなお検討を要する、腺癌の転移も可能性あり、PAS(-), vimentin(-), keratin(-), alpha-ACT(+), lysozyme(-)	90-579
887	2-34	愛媛大中検病理	男	83	左耳下腺腫瘍：徐々に増大	Carcinoma: carcinoma in pleomorphic adenomaか、命名が問題、間質にはAB(+), cribriform patternなくACCとは異なる	90-678

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考	
通算	年		性	年				
888	2-35	医療短大	男	67	胃粘膜下腫瘍：胃体上部前壁に陥凹を伴う腫瘍があり、増大傾向あり	胃悪性リンパ腫：B-cell monoclonality(+), Igは？ $\lambda > \kappa$ 、周辺にRLHの所見は見られない、未分化癌の鑑別が必要	89-0082 89008-2	
90-7-28	889	2-36	松山赤十字病院	女	23	口唇の色素性母斑：生下時より上口唇に黒褐色点あり、徐々に増大隆起する	Balloon cell naevus：50%以上の細胞胞体内に空胞あり	S90-2680
890	2-37	松山赤十字病院	男	64	喉頭癌：元来健康、急激な呼吸困難で緊急入院し、気管切開	Basaloid squamous carcinoma, larynx.	S90-2704	
891	2-38	松山赤十字病院	女	62	甲状腺腫瘍：20年前より甲状腺右葉上極に径1.5×1.5cmの腫瘍	Hyalinizing trabecular adenoma of the thyroid：細胞学的には核溝や核内空胞があり、乳頭癌に類似、組織学的には索状腺腫	S90-3220	
892	2-39	市立宇和島病院	男	65	多発性骨髄腫：CTで肝門及び脾門に腫瘍あり、前胸部には胸骨と連続する皮下腫瘍あり、血中のM蛋白はIg G, Kで9.3g、全身の骨に打ち抜き像あり	多発性骨髄腫：IgG, κ type、肉腫状増殖	90-1522	
893	2-40	市立宇和島病院	女	36	卵巣腫瘍：両側卵巣腫大と肝転移巣あり、血中AFP上昇、卵巣胚細胞腫瘍の疑いで両側卵巣摘出	卵巣転移性腺癌：原発は胃、AFP産生胃癌	90-1718	
894	2-41	市立宇和島病院	男	42	直腸癌：直腸のBorrmann 1型隆起性病変、最大径6cm	悪性リンパ腫(rectal tonsilla)：剖面は白色充実性。固有筋層まで浸潤するも境界は明瞭、リンパ節転移なし	90-1720	
895	2-42	県立中央病院	男	74	左副腎腫瘍：糖尿病にて精査中、後腹膜腫瘍を発見	Pigmented schwannoma (後腹膜)：腫瘍は左副腎に接して存し、大きさ12×11cm境界明瞭、剖面は黄色充実性で薄い被膜を有す、melanin(+)	90-1360	
896	2-43	県立中央病院	女	1	左頸部軟部腫瘍：2か月前に気付く、術前血清AFP、NSE正常、VMA陰性	Benign lipoblastoma：左頸部から左鎖骨下方に存し、僧帽筋と癒着、頸椎椎体側方に接す、剖面は灰褐色から灰白色、充実性	90-1534	
897	2-44	県立中央病院	男	55	右蝶形骨髄膜腫：視力低下、頭痛、腫瘍は右蝶形骨髄膜に付着	Anaplastic meningioma：脳実室内への浸潤、小壊死巣の存在、核分裂像、乳頭状構造の存在などより悪性か	90-1774	

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
898	2-45	愛媛大1病理	女	38	後腹膜腫瘍：右腎周囲腫瘍の診断で手術	Well diff. sclerosing type liposarcoma：右腎周囲に10×8×6cm、9×7×4cmの後腹膜腫瘍	90-489
899	2-46	愛媛大1病理	女	56	右大腿筋肉腫瘍：5カ月前に右大腿腫瘍に気付く	Myxoma, intramuscular：頻度が少ない	90-794
900	2-47	愛媛大2病理	男	55	膀胱後部の腫瘍：腫瘍は膀胱後部前立腺上方にあり	精囊原発腺癌疑い：大きさ12×7cm、剖面で茶褐色液流出、精液臭あり、左睾丸は認められず、右睾丸は陰嚢内、CEA(-), AFP(-), PSA(-), PSAP(±), HCG(±)	2-1637
901	2-48	医療短大	男	35	回腸穿孔性腹膜炎で手術	単純性潰瘍あるいは悪性リンパ腫：回盲部より口側1mの所で腸間膜対側に頸2mmの穿孔あり、その部を中心に白色地図上病変あり	89-011
902	2-49	四国がんセンター	女	51	直腸粘膜下腫瘍：半年前より不正性器出血あり、直腸腫瘍を指摘され手術	直腸平滑筋肉腫：直腸下部にあり、9×4.5cm大の卵型粘膜下腫瘍で腔後壁に浸潤し、潰瘍を形成、剖面では黄白色、小出血巣みれど壊死はない	90-2087
903	2-50	松山赤十字病院	女	61	頭皮扁平上皮癌疑い：約20年前より左頭頂部に小结節あり、最近徐々に増大	Proliferating tricholemmal tumor：多数のkeratin pearl(+)毛嚢様の中心部角化と石灰化が特徴的	S90-2149
904	2-51	松山赤十字病院	女	48	子宮頸部ポリープ：2週間前より不正性器出血、1.5×0.5×0.5cm大	Lymphoma-like lesion of lower genital tract：一見悪性リンパ腫様の異型リンパ球の増殖あれど、monoclonality不明、多くの場合良性の経過	S90-4794
905	2-52	松山赤十字病院	女	76	左足底部腫瘍：数箇月前より足底部の腫瘍に気付く、圧痛、寒冷時痛のため切除	Spindle cell hemangiopericytoma：low grade malignancy、海綿状血管増生、平滑筋に囲まれた血管の中で紡錘形細胞や小型血管が増殖、細胞内空胞(+)	S90-5465
906	2-53	市立宇和島病院	女	40	子宮筋腫：子宮筋腫の診断で単摘、長径6cm球型で子宮壁内に存在	Endometrial stromal tumor：境界明瞭、mitosisは稀、脈管浸襲なし、良性か悪性か、境界病変	90-1978
907	2-53	市立宇和島病院	男	37	右肩肉腫：10カ月前に化膿性肩関節炎で排膿、16日前に気胸にて開胸、生検で転移、原発巣検索のため肩関節周囲を生検	Epithelioid sarcoma：すりガラス状胞体を有し上皮様の配列、間質に硝子化、中心部壊死、周囲にリンパ球浸潤、多結節状、EMA(+), keratin(+), vimentin(+)	90-2372

90-10-13

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
908	2-54	市立宇和島病院	女	28	全身リンパ節腫大：9カ月前にmumps(+)1カ月前から全身リンパ節腫大に気付き皮疹も出現、Ig G3090mg/dl、Ig M 1183mg/dl、頸部リンパ節生検	IBL-like T-cell lymphoma:PVCの樹枝状増生、わずかにpale cell(+)CD-4はごく少数陽性、遺伝子の再構築はありそう	90-2428
909	2-56	愛媛大1病理	男	31	Crohn病：頻回のレイウス症状あり、X-Pでクローン病疑う、回盲部切除、縦走潰瘍と狭窄あり	Crohn病：全層性炎、小型肉芽腫、浅い潰瘍、神経増生	90-688
910	2-57	愛媛大1病理	男	33	肺アスペルギルス症：15才時結核、最近数年咳と発熱繰り返す、上記診断にて左肺上葉切除	肺奇形腫：腫瘍は肺実質内にあり嚢胞性、気管支壁、脾、平滑筋、脂肪、軟骨、胸腺組織を含む	90-690
911	2-58	愛媛大中検病理	男	59	腰背部脂肪腫あるいは結核：30年前にtbcにて胸郭形成術、その頃より腰背部に腫瘤あり、1-2年前より増大、6×3cm弾性硬、辺縁整、筋肉とは遊離	MFH?：一部横紋筋肉腫に似るがPAS(-)PTAH(-)S-100(+)+VMT(+)+myoglobin(-)+actin(-)+desmin(-)+AAT(-)+ACT(-)	
912	2-59	愛媛大中検病理	男	68	肝細胞癌：入院時、肝・脾・肺・胃に腫瘍を認め、肝癌の転移と考えられた、AFP188, 600-351, 600. CEA1.5ng/ml	組織像は明細胞型の肝細胞癌(様癌)であるが肝は肉眼的に肝硬変なく転移性とみなされる、肺原発よりも胃原発を疑う	89-88
913	2-60	四国がんセンター	男	55	腹腔内リンパ節腫腸：主訴は全身倦怠感、血清蛋白異常(Ig M高値)と腹腔内リンパ節腫脹を指摘	Waldenstrom's macroglobulinemia：大部分リンパ節構造を保つが部分的にはmonotonous、Dutcher body(+)同部にはPAS(+), Ig M(+)	90-2538
914	2-61	四国がんセンター	男	58	肝内嚢胞性腫瘍：肝左葉S4に嚢胞性病変を発見され経過を見ていたが増大してきたため切除、腫瘍マーカー正常範囲	Cystadenocarcinoma of the liver:2.6×1.9cm、高円柱状腫瘍細胞が乳頭状ないし櫛の歯状に増殖、浸潤を思わせる像あり	90-2061
915	3-1	松山赤十字病院	男	84	大動脈周囲リンパ節：腎細胞癌の診断で腎摘、この際に摘出されたリンパ節	Nodal angiomatosis：欧米ではKaposi's sarcomaとの鑑別が問題、肝硬変や悪性腫瘍の転移などによるリンパの閉塞が原因	S90-4032
916	3-2	松山赤十字病院	女	70	頭部皮膚腫瘍：約10年前に頭頂部の小結節に気付く、徐々に増大し鶏卵大となったため切除希望	Solid-cystic hidradenoma of the skin(Winkelman). Eccrine poromaとの鑑別を要する	S90-2150
917	3-3	松山赤十字病院	女	75	子宮頸部腫瘍：妊娠分娩の経験なし、性器不正出血で来院、子宮頸部が乳頭状組織で置換	Papillary squamous cell carcinoma：肉眼像はverrucous carcinomaに類似する	S90-6854

191-2-16

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
918	3-4	市立宇和島病院	男	50	胃悪性リンパ腫：胃のfornixから体部にかけて7×5cmBorrmann2型の辺縁の隆起を伴う潰瘍性病変	Malignant lymphoma, deffuse, large cell type, T-cell malignancy: malignant lymphoma with eosinophilia	90-2839
919	3-5	市立宇和島病院	女	68	足底悪性黒色腫：14年前より足底に黒色斑があり、3年前よりその中央部が結節状に隆起	Malignant melanoma, nodular melanoma	90-3575
920	3-6	市立宇和島病院	女	44	子宮筋腫：子宮には4cm大までの3個の子宮筋腫に似た腫瘍をみる	Adenomatoid tumor, multiple: mucicarmin (+), AB(+), keratin (+), vimentin一部に(+)	90-3733
921	3-7	愛媛大2病理	男	58	回盲部腫瘍：30年前に虫垂切除、回盲部に同心円状の層状構造物あり	脂肪壊死	90-435 (町立宇和病院)
922	3-8	愛媛大2病理	女	47	臀部腫瘍：2-3か月前より右深部に硬い骨様の腫瘍に気づき、切除希望、剖面は黄白色骨様	脂肪壊死	2-3516 (成人病センター)
923	3-9	愛媛大2病理	女	68	下部胆管癌：閉塞性黄疸にて発症、膵頭十二指腸切除施行	Undifferentiated carcinoma of the pancreas: 肉腫様成分と高分化管状腺癌が混在、	90-637
924	3-10	県立中央病院	男	31	肺結核?：1984年4月右肺下葉腫瘍で手術(慢性肉芽性炎症)、1985年蓄膿手術、1988年8月左芽窩内腫瘍摘出、その後再発し、鼻中隔欠損もきたす、血清好中球細胞質抗体高値	Wegener's granulomatosis: 好中球浸潤を伴う肉芽腫形成	84-1187: ES828 (89-127) と同一症例
925	3-11	愛媛大中検病理	女	42	甲状腺腫瘍：32×25×18mm、被膜あり、リンパ節腫大なし、甲状腺機能正常	Encapsulated follicular carcinoma: medullary carcinoma? calcitonin と congo-red は未検	90-2277
926	3-12	愛媛大中検病理	女	31	小脳腫瘍：CT, MRIにて第4脳室に腫瘍、Hypervascular	Choroid plexus papilloma, borderline malignancy	90-2552
927	3-13	愛媛労災病院	女	63	脳腫瘍：頭部CTで延髄、小脳橋角部にかけてlow density mass enhanced effectに乏しい	Vacuolated(microcystic) meningioma: enhanced effectに乏しいのは unusual	91-36
928	3-14	愛媛労災病院	男	37	後腹膜腫瘍：多発性神経炎様症状あり、腹部CTにて後腹膜から総腸骨動脈周囲に多発性の腫瘍をみる、開腹下に針生検、血清Igはほぼ正常、泳動にて少量のM-蛋白(IgA, lamda) 高月病	Castleman's tumor: plasma cell type: with nodular hyperplasia or extramedullary plasmacytoma?	91-45

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
929	3-15	愛媛大1病理	女	15	左卵巢腫瘍：多房性、黄色漿液をいれ一部に充実部、6500gr、血中テストステロン・アンドロステノジオン高値	Sertoli-stromal cell tumor: of intermediate differentiation	90-2435
930	3-16	愛媛大1病理	男	69	結節性多発動脈炎(PN)疑い：不明熱、四肢麻痺つづく、非腹筋生検	壊死性血管炎(PN)	90-1940
931	3-17	四国がんセンター	男	42	左肩皮下腫瘍：2年前より左肩の皮下腫瘍に気付く、最近気になり摘出希望	Dermatofibroma：二階建て構造、表皮のacanthosis	88-3892
932	3-18	四国がんセンター	男	29	右耳下腺腫瘍：2年前より右耳下部の腫瘍に気付く、平成2年10月より腫瘍が増大してきた	Malignant lymphoepithelial lesion: benign lymphoepithelial lesion から扁平上皮癌まで、EB virus抗体価の上昇はない	90-4104
191-6-22 933	3-19	松山赤十字病院	女	47	Epulis疑い：約40年前より左上第一大臼歯根部の歯肉に径5mmの腫瘍を自覚、次第に増大するため切除	Epulis osteoplastica & epulis cementoplastica：ポリープ状に突出、多分化能を持つ歯の原基より発生	91-1415
934	3-20	松山赤十字病院	女	75	甲状腺炎：3年前より前頸部腫瘍に気付く、感冒症状で受診したとき、同腫瘍の精査施行、弾性硬、エコーで石灰化あり、Thyroglobulin 320と上昇、T3, T4, TSHは正常	亜急性肉芽腫性甲状腺炎：臨床的には悪性腫瘍との鑑別が問題となる	91-2068
935	3-21	松山赤十字病院	女	41	左乳頭部腫瘍：約半年前より左乳頭部の腫瘍に気付く、径6×7mm弾性硬	乳頭部腺腫：2相構造を保つ、筋上皮がHHF35できれいに染め出された、乳腺では太い導管周囲にも筋上皮の介在あり	91-2450
936	3-22	市立宇和島病院	男	63	悪性リンパ腫：定期検診のエコーで後腹膜から肝門のリンパ節腫大を指摘される、全身の表在リンパ節は大豆大までに腫大	Mantle zone lymphoma: L26(+), UCHL-1(-)、大部分はびもん性中細胞型、一部にmantle zone (+) naked germinal center(+)	91-20
937	3-23	市立宇和島病院	男	66	喉頭癌：嗄声を主訴に来院、声門の生検で扁平上皮癌と診断、10Gyの照射後喉頭全摘	表層は扁平上皮癌、深部に結節状にnodular type amyloidosis(+): Congo red(+), 過マンガン酸カリにて消化されない	91-555
938	3-24	市立宇和島病院	女	52	尿道カルンケル：会陰部出血で受診、外尿道口後部に小指頭大の広基性隆起性病変あり切除	尿道の腺癌：その組織発生は不明、杯細胞腺あるいはクーバー腺由来？きわめて稀	91-1298
939	3-25	成人病センター	男	74	右環指軟部腫瘍：数年来、右環指中指節部に1.5cm径の軟骨様の腫瘍あり、腱や皮膚との癒着なし	Giant cell tumor of the tendon sheath：巨細胞が乏しいタイプ	3-1821

No.		提出施設	患者		臨床診断および必要事項	病理組織学的診断	備考
通算	年		性	年			
940	3-26	愛媛大中検病理	女	35	卵巣嚢腫：約1年前より腹部腫瘍あり、摘出卵巣は巨大で粘液を溶れる	粘液性嚢胞腺腫：大部分は良性、中央部に境界病変を含んでいたが、臨床的には良性扱いのほうがよからう	91-972
941	3-27	愛媛大中検病理	男	61	耳下腺腫瘍：約2か月前より右耳下腺部に径55×50mmの腫瘍あり、圧痛なし、顔面神経麻痺なし	腺癌 (NOS) : mucoepidermoid tumorともadenoidcysic carcinomaともいえない	91-1169
942	3-28	愛媛大1病理	女	70	上顎洞鼻腔腫瘍：5カ月前より右鼻閉、他院にてpolypectomyしてangi sarcomaと診断された、平成3年3月8日、腫瘍摘出術、腫瘍はポリープ状で出血壊死伴う	Malignant melanoma: premelanosome染色(三島法)でmelaninが証明された	91-449
943	3-29	県立中央病院	女	54	本年5月初めころより顎下部に腫瘍出現、2個、大きさ0.6×0.6cm	Piringer' lymphadenitis: 小型類上皮細胞巣、未熟洞組織球症を伴うリンパ節炎、toxoplasma抗体価×128(+)	91-1707
944	3-30	県立中央病院	男	67	右手掌部腫瘍：研磨工として働いてきたが、6-7年前より右手掌の腫脹に気付く、腫瘍は掌側屈筋腱を取り巻くように存し、光沢ありセラチン様	いわゆるmyxoma：ただし、手掌に発生するか？fibromatosisの粘液変性か	91-1649
945	3-31	四国がんセンター	男	58	口唇腫瘍：10年前他院にて左上口唇の腫瘍を口腔内より摘出した既往あり、同部の皮膚に腫瘍出現したため、口唇皮膚側より摘出、直径2cm、弾性軟、可動性良好、無痛性	Mixed tumor(myoepithelioma)：筋上皮の増殖が強い混合腫瘍、由来は唾液腺か汗腺か、唾液腺由来混合腫瘍は再発時しばしば多結節状となる	91-1631

縦隔原発悪性胚細胞腫瘍 (seminoma)

国立病院四国がんセンター 万代 光一、土井原博義、中西 慶喜
元井 信、森脇 昭介

症例 787: 60歳、男 職 業: 国家公務員

臨床診断: 縦隔腫瘍

既往歴・家族歴: 特記すべきことなし

現病歴: 昭和60年5月、健康診断の胸部レ線にて異常陰影を指摘され当院を紹介される。精査にて気管右側の縦隔に腫瘤を認め、確定診断の目的で手術施行。

肉眼所見: 腫瘍は気管右方の上部中縦隔に位置し、奇静脈を巻き込んでいたが、肺とは鈍的に剥離可能であった。周囲のリンパ節には肉眼的に腫大を認めなかった。腫瘍は大きさ4.5×3.5cm。被膜で包まれ、断面は灰白色で多結節状、中心に多数の壊死巣を混えていた。

組織所見: 腫瘍は線維性の結合織で境界され、分葉状あるいは多結節状の増殖を呈する。個々の結節の中は凝固壊死・出血の傾向が強い。その周辺に淡好酸性～淡明な胞体に富み、異形的な類円形～多稜性の核を有する腫瘍細胞がシート状あるいはびまん性に配列し、これを取り囲むようにリンパ球・形質細胞浸潤がみられる(写真1、2)。結節間の結合織は硝子化したり、血管の増生やヘモジリン沈着を伴い、しばしば、結節内の壊死巣と連結する。増生する腫瘍細胞の核は大小不同、核形の不整を示し、クロマチンは粗で核縁に凝集し、明瞭な大型核小体を1～2個有する(写真3)。腫瘍細胞の配列はシート状、あるいは胞巣状で低分化扁平上皮癌を思わせる部位(写真4)や部分的には非上皮性の配列を示す所もみられる。多核巨細胞の出現や肉芽組織の部分は認められない。また、正常の胸腺組織や血管周囲腔の存在は認められなかった。胞体にはPAS陽性顆粒が場所によって種々の程度に含有される(写真5)。また、硝子滴様の構造物が散見される(写真6)。鍍銀染色では、嗜銀線維が数個～20個位の腫瘍細胞を取り囲み、その発達がよい(写真7)。以上の組織像からseminoma(あるいは未分化胚細胞腫)が考えられ、胸腺腫と鑑別を要した。

免疫組織化学的検討: keratin(DAKO)、Leu 7(Beckton-Dickinson)、 α -fetoprotein(DAKO)、hCG- β (DAKO)、CEA(DAKO)、UCHL-1(DAKO)、Mx-Pan B(協和メディックス)について酵素抗体ABC法を行った。その結果、腫瘍細胞はKeratin、Leu 7、AFP、CEA、hCGいずれも陰性で、周囲のリンパ球はUCHL-1、Mx-PanB、Leu 7陽性の各種のサブセットの混在をみた。すなわち、胸腺腫としての証拠は得られなかった。

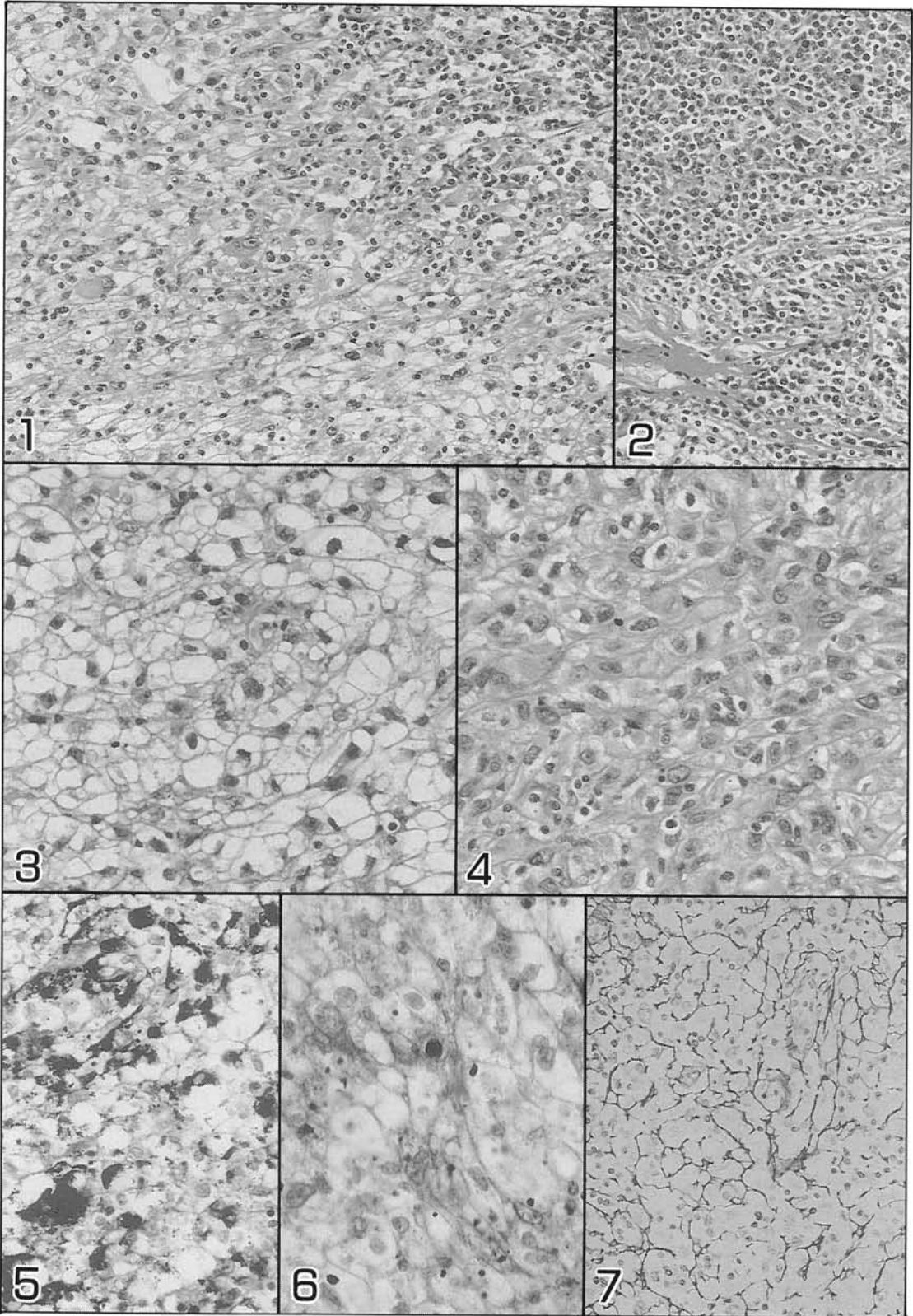
病理組織診断: 腫瘍の発生部位は中縦隔であり、血管周囲腔の形成がみられないこと、免疫組織化学的に胸腺腫としての証拠が得られなかったことから、seminomaと診断した。

考 察: 縦隔原発腫瘍のうち胚細胞性腫瘍は本邦では胸腺腫に次いで多い腫瘍である。性腺外胚細胞性腫瘍としては縦隔発生が最も多く、次いで後腹膜、仙骨部などで松果体発生はきわめてまれである。縦隔ではほとんど前縦隔に発生し、後縦隔発生はまれである。縦隔胚細胞性腫瘍の大部分は成熟奇形腫であり、悪性腫瘍の頻度は少なく、諸家の報告では15-25%である。手島らによれば国立がんセンターの縦隔胚細胞性腫瘍47症例のうち成熟奇形腫は35例で、成熟奇形腫以外の悪性例はすべて男性である。その内訳は未熟奇形腫5例、seminoma 1例、embryonal carcinoma 1例、混合型5例であったという。縦隔胚細胞性腫瘍の発症年齢は精巣の成人型や卵巣腫瘍に比して若く10歳～40歳代であり、予後はいずれも不良で成人型精巣腫瘍に類似していた。Seminoma例は22歳、anaplastic typeであり、術後2年で死亡している。また、吉竹らによれば、縦隔seminomaの報告は内外併せて70例(1984年末まで)、年齢は20-40歳代、ほとんどが男性である。縦隔原発悪性胚細胞腫瘍のうちseminoma型は25-30%を占めるといふ。

自験例は60歳と高齢であること、腫瘍は中縦隔に存在するなどseminomaとするにはなお疑問点を残している。また、縦隔原発の胚細胞性腫瘍のうち奇形腫を除く悪性腫瘍についてはなお胸腺腫あるいは胸腺癌との組織分類上の混同がみられる。最近、胸腺癌に関する臨床病理学的検討や組織学的再分類がなされており、自験例と同様の組織型がclear cell carcinomaとして報告されている。

文 献

1. 吉竹 毅, 浅野 献一, 毛利 昇: 縦隔原発胚細胞性腫瘍. 日胸45: 101-113, 1986
2. 手島 伸一, 下里 幸雄, 岸 紀代三ほか: 胚細胞性腫瘍: 臓器別臨床病理学的特異性. 病理と臨床1: 472-482, 1983
3. Truong, L. D., Mody, D. R., Cagle, P. T. et al.: Thymic carcinoma. a clinicopathologic study of 13 cases. Am J Surg Pathol 14: 151-166, 1990



胃粘膜内印環細胞様細胞の増殖

国立病院四国がんセンター 万代 光一、土井原博義、中西 慶喜
元井 信、森脇 昭介

症例 794：59歳、男 職 業：農業

臨床診断：早期胃癌

既往歴・家族歴：特記すべきことなし

現病歴：自覚症状は特になし。冠不全にて入院中、上部消化管検査を受け、偶然に胃体上部の異常陰影を指摘される。諸検査の結果、胃体上部後壁のⅡc型早期胃癌と診断され、胃切除術施行。

切除胃の内視鏡所見（病理番号 87-3897）：体上部後壁に粘膜皺襞の集中を伴う大きさ2.5×1.5cmのⅡc型局面をみる。

組織学的所見：主病巣の組織診断は胃癌取扱規約に従えば、高分化型管状腺癌（写真1）、深達度mの早期胃癌で脈管侵襲なし。所属リンパ節への転移はない。また、このⅡc型局面の小窩寄りに大きさ7×5mm平坦型の異型上皮(moderate dysplasia)を偶然認めた。

背景胃粘膜の組織学的検索にて、主病巣と離れて前庭部後壁の萎縮粘膜の腺底部に、淡好酸性の豊富な胞体と基底部に偏在した核を有する印環細胞類似細胞の増殖巣が散在性にみとめられた（写真2）。これらの増殖細胞が果して印環細胞癌の初期像かどうか、きわめて興味ある所見である。

PAS染色では、これらの細胞胞体は幽門腺、副細胞や腸上皮化生杯細胞の染色性に比べ淡明で桃色であった。Alcian-Blue(AB)染色では杯細胞や印環細胞癌は陽性を示すが、本細胞は陰性。PAS-AB重染色では杯細胞や真の印環細胞癌細胞が濃紺あるいは暗紫赤色に染色されるのに対し、本細胞は桃色ないし淡赤色に染色され、その粘膜はAB染色陰性であった（写真3：AB染色。a：杯細胞 b：印環細胞類似細胞）。鍍銀染色では、既存の腺管基底膜は保たれ、浸潤性の増殖は認められなかった（写真4）。

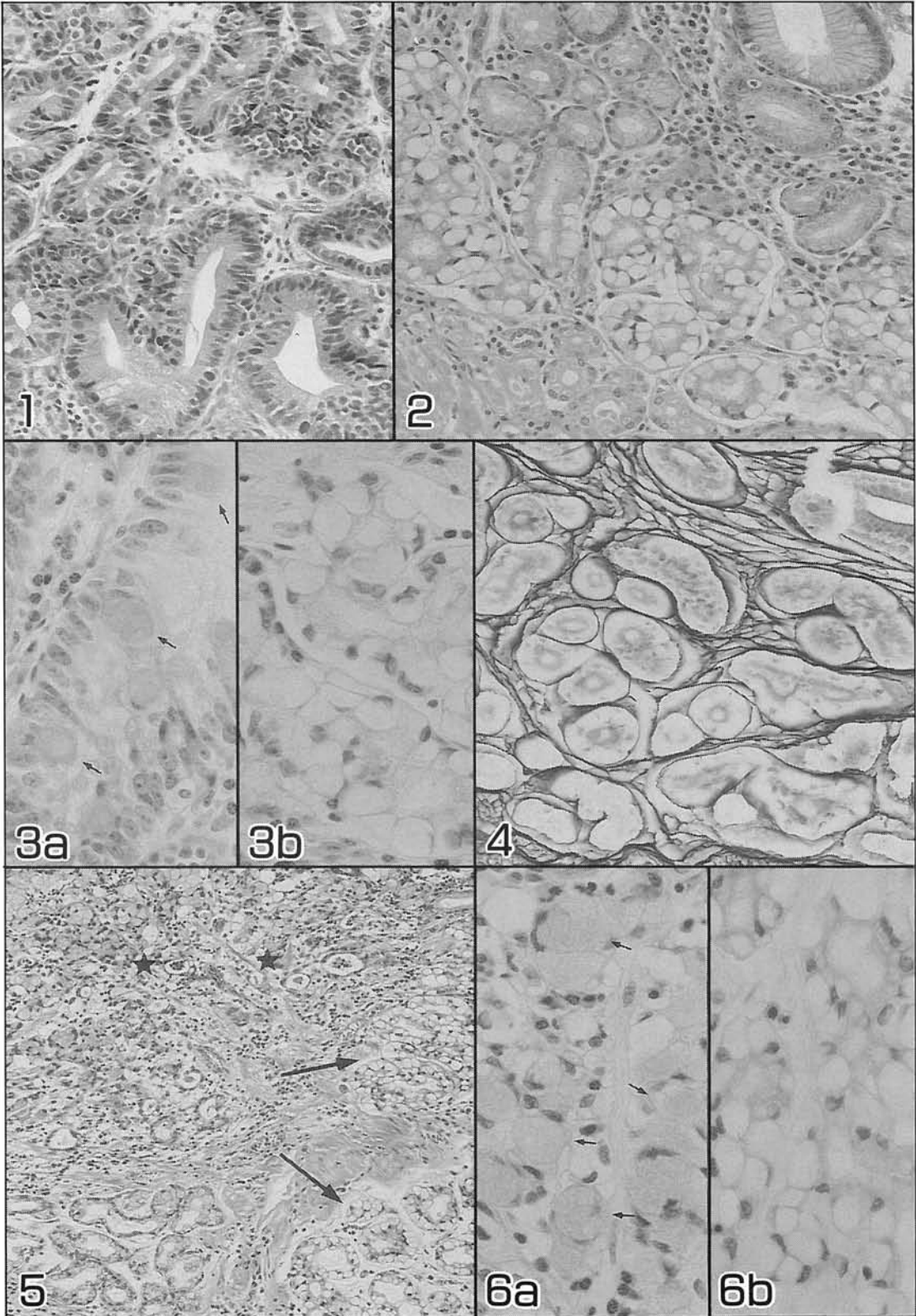
上記のような印環細胞類似の淡明で豊富な胞体を有する細胞の集簇は、他の切除胃でもまれならず観察された。写真5は57歳男性の胃体部小窩に占居する早期胃癌Ⅱcの組織像である（病理番号 87-2865）。粘膜内に増殖する印環細胞類似細胞の集簇を認める（写真5：星印★は印環細胞癌を、矢印↑は印環細胞類似細胞を示す）。これらの集簇は既存固有胃腺の底部に位置し、その基底膜を越えて増殖する像は認められなかった。AB染色では印環細胞癌の胞体は陽性であるが、本細胞は陰性であった（写真6：AB染色。a：印環細胞癌 b：印環細胞類似細胞）。

考 察：このような印環細胞類似細胞の組織発生はいかなるものであろうか。私たちは以下のような根拠で印環細胞癌ではないと考えている。1. 胞体内の物質は、PAS染色弱陽性、Alcian-Blue染色陰性であり、変性した中性粘液である可能性が高い。一方、印環細胞癌細胞はしばしばAB陽性の酸性ムコ多糖類を有する。2. 固有胃腺の増殖細胞帯よりも下方の腺底部に集簇する。3. 細胞間接着が強く、associative cellとしての性格を示す。4. 既存の基底膜を保っている。5. 増殖能を有しているような未分化細胞集団が認められない。粘液細胞はすでに分化を終えた細胞であり、DNA合成能はないとみなされる。藤田らによると増殖細胞帯から上方へ向かう印環細胞は被蓋上皮や腸の杯細胞にみられるタイプの粘液や腸上皮化生型スルフォムチンを有するが、ときに下向きに移動する印環細胞がみられるという。この場合、これらの印環細胞は幽門腺や副細胞型の粘液を分化抗原として産生するという。従って、AB染色陰性は必ずしも印環細胞癌ではないことの根拠にはならないが、粘液染色の態度は幽門腺や副細胞のそれとも異なっていた。

以上のような所見からこれからの印環細胞癌類似の細胞集団は深部固有胃腺の変性像である可能性が高いと考えられた。

文 献

1. 藤田 哲也：細胞動態からみた胃癌の発生と進展。日病会誌 70：23-54, 1981



大腸腺腫を伴った若年性大腸ポリポージスの一例

愛媛県立中央病院 古谷 敬三、田尾 茂
木村 誉司、赤松 明

症例 778：62歳、女

臨床診断：1972年胃癌で胃部分切除。1985年頃より高血圧。

家族歴：1986年10月から下血がはじまった。同月当院にて直腸ポリープ生検で、若年性ポリープと診断された。1987年1月注腸透視にて大腸ポリポージスを指摘された。同年2月の大腸生検で腺腫がみつかった。ネフローゼの為同年3月腎生検を実施した。貧血、下血、ネフローゼの悪化傾向にて、同年3月右半結腸切除と残り大腸のポリペクトミーを実施した。術後経過は現在に至るまで良好で、腎機能も改善された。

病理所見：(1) 大腸：ポリープは、切除大腸に14個とポリペクトミーされたもの4個で、合計18個認められた。ポリープの多くは表面平滑であったが、下行結腸とS字状結腸の2個は、部分的に乳頭状を呈していた。ほとんどのポリープは径15mm以下であったが、2個は径35mm以上であった。なお山田分類によると、I型3個、II型7個、III型6個、IV型2個であった。組織学的には18個すべてが若年性ポリープであった(写真1)。しかし、その内4個(22.2%)に異型上皮の増生巣を伴っていた。その1個(山田I型、6×5×2mm大)にはポリープの頂上にごく小さい管状構造を呈する異型増生巣をみとめた(写真2)。他の2個(山田III型、7×7×4mm大と10×10×8mm大)には、ポリープ表層に腺管絨毛腺腫をみとめた(写真3)。残る1個(山田IV型、14×10×5mm大)では、ポリープの多くの部分が腺管絨毛腺腫で占められていた(写真4)。これら異型増生巣を伴うポリープの平均最大径(9.3mm)と、伴わないポリープのそれ(9.7mm)は、ほぼ同じであった。

(2) 胃：残胃、切除胃のいずれにもポリープは認められなかった。15年前の十二指腸側2/3切除胃には、幽門小弯側にボルマンII型の粘液腺癌をみとめた。

(3) 腎組織(生検)：膜性腎症の所見を認めた。顕微鏡で糸球体糸球体壁に顆粒状のIgGとC₃がみられた。電顕では、基底膜の外側、上皮側に細顆粒状のdepositが沈着し、その程度はStage I (Ehrenreich & Churg)に相当していた。

若年性ポリポージス88報告例の臨床病理学的分析：88例の平均年齢は15.6才であった。88例中16例(18.2%)に若年性ポリープ内異型増生巣をみとめた。胃腸管腫瘍の発生頻度は17%(15/88)で、その内、腺腫11.4%(10/88)、癌腫10.2%(9/88)であった。若年性ポリープ内に異型増生巣を伴う群の平均年齢(22.9才)および胃腸管腫瘍の発生頻度(43.8%、7/16)は、伴わない群のそれら(13.6才および11.1%、8/72)より高齢、高頻度であった。

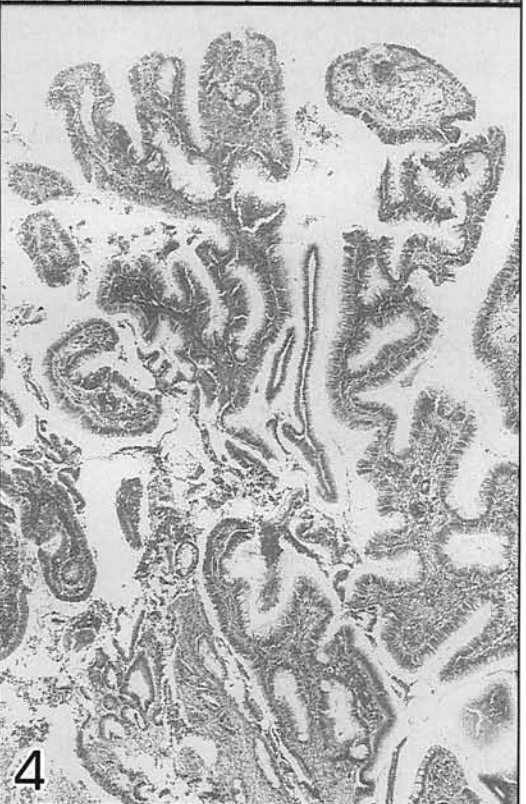
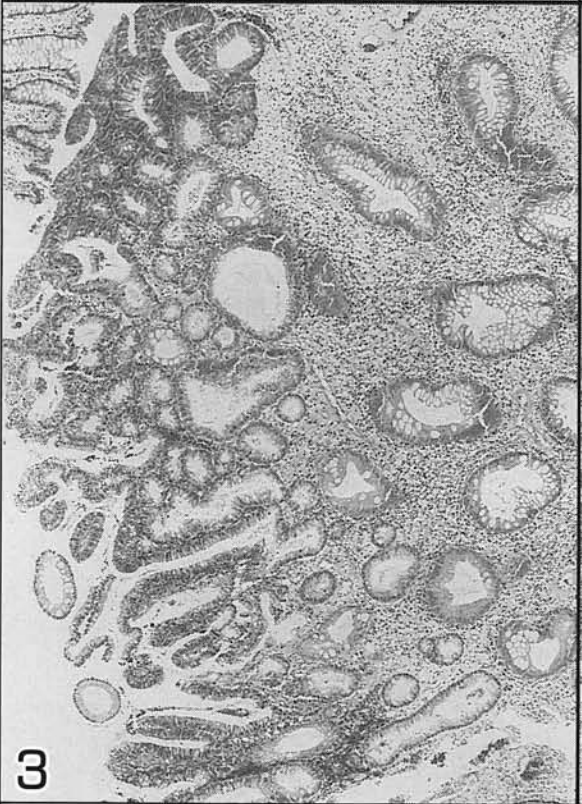
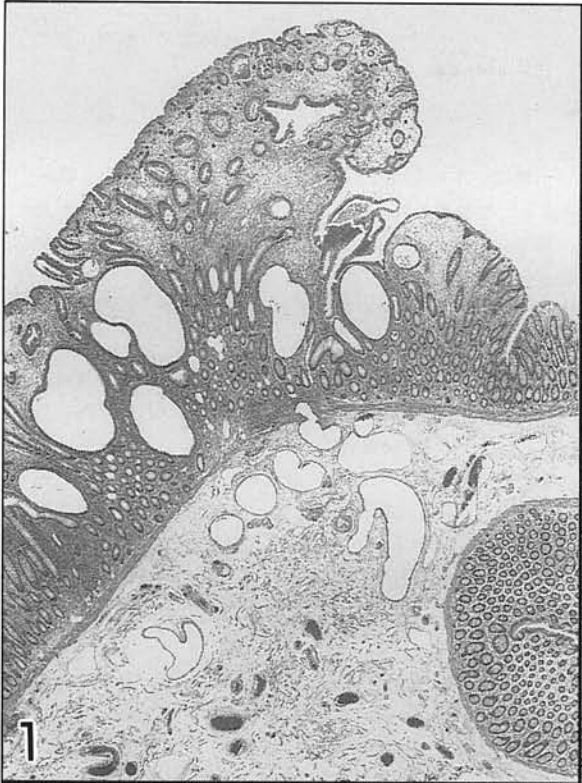
一家系内3例に急性糸球体腎炎をみとめた。その内2例では、大腸切除後2年あるいは5年間、腎炎が続いた後、自然治癒した。他の1例では、大腸全摘後、1年間腎炎が続いたが、残腸にポリープがなお存在するにもかかわらず、治療により治癒した。

考 察：若年性ポリポージスの報告例は少なくないが、多発性腺腫症と異なり、癌化はないと考えられている。しかしながら、自験例の様に若年性ポリープ内に異型増生巣を伴う頻度(18.2%)も、胃腸管腫瘍の発生頻度(17%)も、決して軽視できない程度の高さであった。若年性ポリープ内に腺腫を伴った自験例は、62才と比較的高齢で、既往歴に胃癌を有していた。88報告例でも、異型増生巣を伴う群では、伴わない群に比して、より高齢で、胃腸管腫瘍の発生頻度(43.8%)も顕著に高かった。以上より若年性ポリポージスの症例でも、比較的高齢で、ポリープ内に異型増生巣を伴う例では、胃腸管の精査と注意深い経過観察が必要と思われる。

自験例では、膜性腎症の合併をみとめた。若年性ポリポージスに糸球体腎炎を合併した3報告例の臨床経過から推定すると、両者の関連性は薄い様に思われる。しかしながら、両者の関連性の可能性を念頭に入れて充分精査された症例の蓄積が待たれる。

文 献

1. Roth SI, Helwing EB: Juvenile polyps of the colon and rectum. *Cancer* 16: 468-479, 1963.
2. Kozuka S: Nature of juvenile polyps in the large intestine. *Acta Pathol Jpn* 26: 500-518, 1976.
3. Goodmann ZD, Yardley JH, Milligan FD: Pathogenesis of colonic polyps in multiple juvenile polyposis. *Cancer* 43: 1906-1913, 1979.



症例 819：9 カ月、女

主 訴：腹部膨隆

既往歴・家族歴：特記すべき事なし

現 病 歴：1 か月前に腹部の膨隆に気づき来院した。入院時、左の側腹部に可動性良好の腫瘤を触知し、乳房の肥大も認めた。CTで多房性、一部充実性の腫瘍（写真1）と腹水が発見され、血中のCA125、E2の上昇もあり、卵巣腫瘍の臨床診断で摘出術を施行した。手術時、腫瘍は左卵巣に発生しており、周囲臓器との癒着や、他臓器への肉眼的移転巣はなかった。但し腹水の細胞診はclass IVであった。

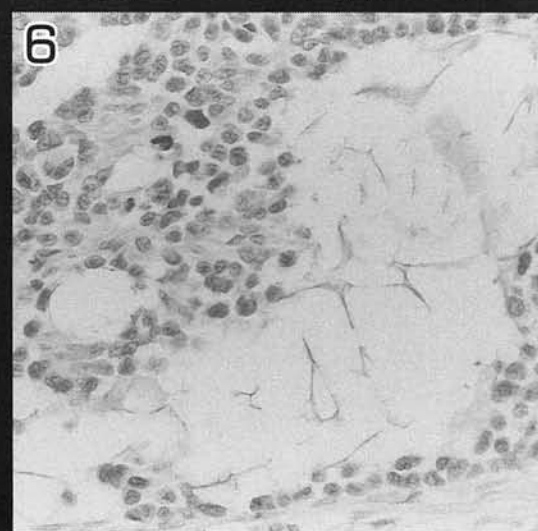
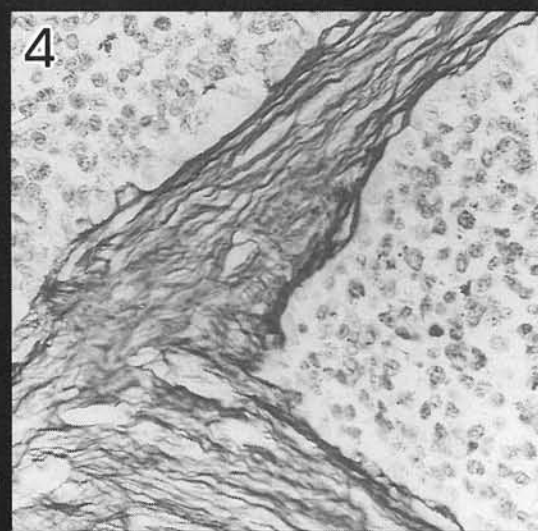
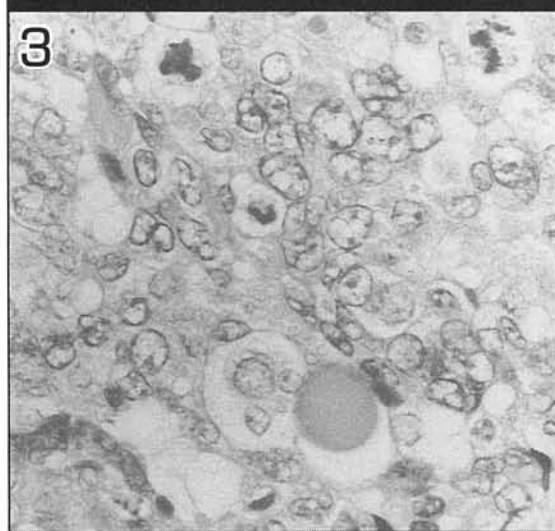
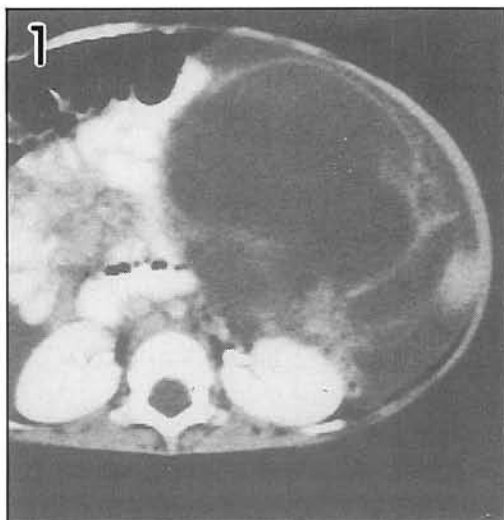
肉眼所見：腫瘍は大きさ約10cm、ほぼ球型で表面は平滑。剖面では多房性で一部充実性であった（写真2）。嚢胞内に出血があったが、壊死は認めなかった。正常卵巣成分はなかった。

組織所見：腫瘍細胞は円型ないし多角型で、核はvesicularなものが多く、grooveも散見された。核分裂は1強拡大で平均3個と多く、一部には多型性や異型性を示し、hyaline globuleを有する細胞もみられた（写真3）。増殖様式は充実胞巣性（写真4）から乳頭状（写真5）まで様々で、充実性の部分でもロゼットないしCall-Exner body様構造を示す細胞がみられ、同様の細胞は不規則嚢胞構造（写真6）や乳頭状増殖も示し、さらに嚢胞の内腔を被覆していた。嚢胞構造内には好酸性でムチカルミン陽性の粘液（写真6）を認めた。好銀線維で囲まれた細胞や、明るい胞体を有する細胞群もみられ、theca cellの関与も推定されたが、脂肪染色は少数の細胞のみ陽性で、著明なルテイン化は証明できなかった。腫瘍細胞はグリメリウス陰性で、PAP法でhCG、LH、FSH、HPL、プロラクチンは全て陰性であった。juvenile granulosa cell tumor, stage Ic と診断した。なお術後14カ月現在、患者は健康で再発の徴候もない。

考 察：Scully groupは小児の顆粒膜細胞腫は成人のそれとは異なる特徴的な組織像を呈するとして、juvenile granulosa cell tumorの名称とentityを与えた。その特徴は1) 発生の多くは思春期前で、30才以降はまれ。2) 定型的Call-Exner bodyは少なく、嚢胞はしばしば不規則な形状を呈しかつ粘液を含む。3) 核は暗調でgrooveは少ない。4) 高頻度にルテイン化がある。5) 多数の核分裂や高度の細胞異型が必ずしも悪性を意味しない。6) 定型的には、再発は術後早期におこるなどである。自験例は上述の特徴をほぼ示した例と考えた。予後は組織所見よりも、stageと良く相関するとの報告が多い。

文 献

1. Scully RE: Tumors of the ovary and maldeveloped gonads, Atlas of Tumor Pathology, 2nd series Fasc 16 Washington AFIP, PP 153-173, 1979
2. Young RH Dickersin, GR, Scully RE: Juvenile granulosa cell tumor of the ovary: A clinicopathological analysis of 125 cases, Am J Surg Pathol 8: 575-596, 1984
3. 高野 弘志, 他: 若年性卵巣顆粒膜細胞腫, 1 治験例, 日小児外科学誌 22: 168-174, 1986
4. Vassal G Flamant F, Caillaud JM, et al.: Juvenile granulosa cell tumor of the ovary in children, A clinical study of 15 cases. J Clin Oncol 6: 990-995, 1988



小腸間膜デスマイド腫瘍の一例

愛媛大学医学部 第一病理 植田 規夫

症例 826 : 56歳、男

主 訴 : 腹部腫瘍

既往歴 : 昭和62年1月に早期胃癌で胃全摘

現病歴 : 昭和63年8月末より左上腹部に可動性を有する腫瘍にきつき、自発痛、圧痛を認めず近医を受診し、当院紹介となる。入院時体格中等度、栄養良好、左上腹部に径約5cmの可動性良好な腫瘍を触知、表面平滑で弾性硬、境界明瞭であった。表在リンパ節は触知せず。検査成績では入院時の一般検血、血清化学検査、血清電解質、検尿に異常を認めず、CEAなど腫瘍マーカーにも異常を認めなかった。残胃・小腸X線造影では空腸の圧排所見を認める。CTでは境界明瞭な腫瘍塊を認め(写真1)、腹部超音波検査では内部に点状に高エコー域のある径4×4cmの低エコーの腫瘍を認めた。血管造影検査では栄養血管は明らかでなく、腫瘍濃染所見も認めなかった。

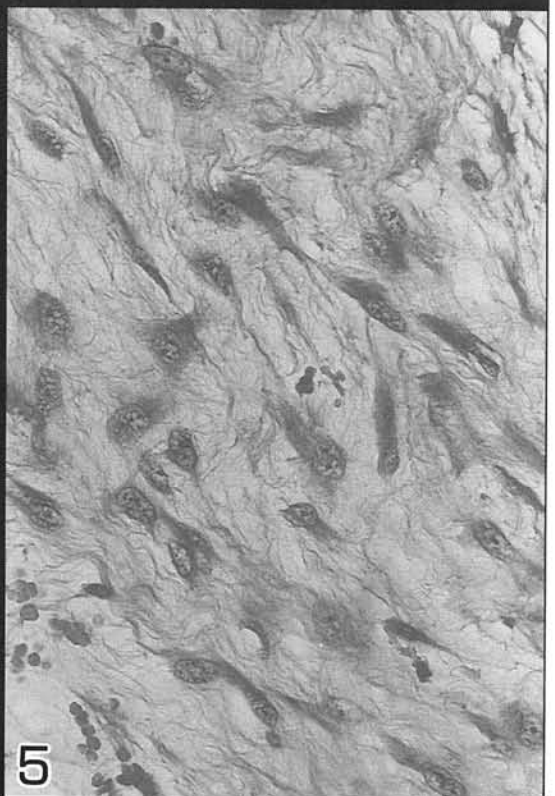
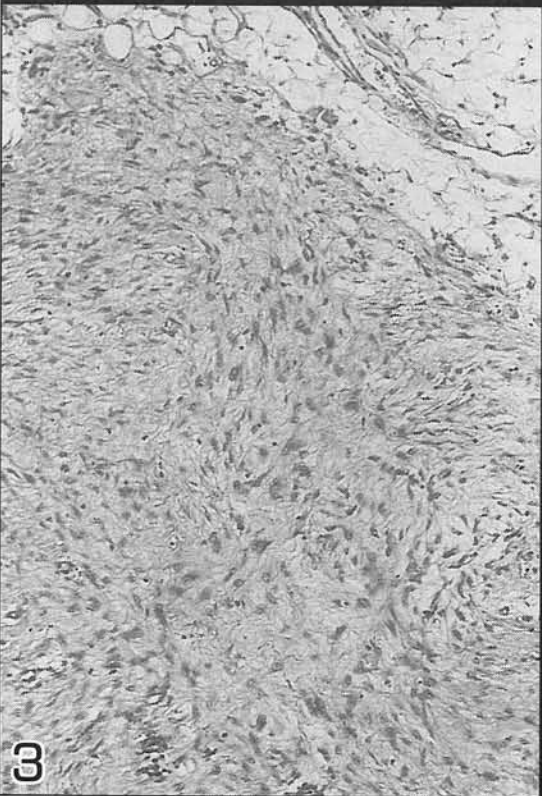
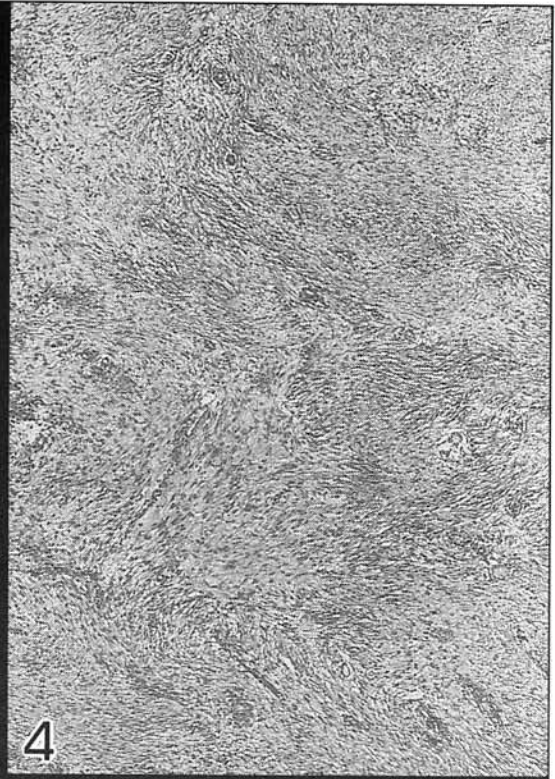
手術所見 : 腹腔内に播種やリンパ節の腫脹は認められず、腫瘍周囲組織への浸潤も認めず、この腫瘍を約30cmの空腸と共に切除した。腫瘍は腸間膜に包まれた弾性硬の充実性腫瘍で5×5×4cmの球形の腫瘍で腸管との交通は見られなかった(写真2)。腸瘍断面の肉眼所見ではやや黄色をみる白色調、充実性の腫瘍所見を示した。

病理組織学的所見 : 腫瘍の本体は線維芽細胞の増生で、膠原線維の豊富な線維性組織よりなっており、炎症所見は認めなかった(写真4)。腫瘍辺縁は組織学的にはあきらかな被膜はなく脂肪組織内に浸潤性増殖を示した(写真3)。増生する線維芽細胞には核異型性は軽度で、分裂像も少なくほとんど認めなかった(写真5)。

考 察 : 腸間膜デスマイド腫瘍はまれな疾患であるが、腸間膜良性腫瘍のなかでは頻度が最も高く、約30%を占める。性差はほとんどなく、比較的若年者に多い。好発部位は小腸間膜で、とくに回盲部に多く、そのほか胃結腸間膜、胃脾間膜、横行結腸間膜等にも見られる。原因は不明であるが、結合組織に何らかの異常があり、それに手術等の外傷、妊娠、ホルモン異常などの誘因が加わって発生すると考えられており、本症例も胃切除時の外的刺戟が誘因となったと考えられる。治療は外科的切除が第一選択であるが、デスマイド腫瘍はその発生部位によって術後の再発率が異なり、腹壁デスマイドは7.7~25%の再発の報告があるが、腹壁外デスマイド症例の再発率は45~75%と割合に高率である。これは腹壁外デスマイドが浸潤性で深部の血管や神経周囲に広がり、そのため完全切除が困難であることが多いためであると考えられている。又、腹腔内デスマイドでは腫瘍がかなり増大するまでほとんど症状がないため、小腸などに癒着浸潤し、さらには腸間膜の血管を浸すことも少なくなく、そのため腹腔内デスマイドでは再発率が高い。

文 献

1. Baron RL, Lee JKT. : Mesenteric desmoid tumors. Radiology 140: 777-779, 1981
2. 横山 良平, 遠城寺宗知, 増田 祥男他 : 腹壁外デスマイド77例の臨床病理学的研究(抄). 日癌治 22: 1259, 1987
3. 古井 修二, 秋元 博, 原 伸一他 : 横行結腸間膜より発生したmesenteric fibromatosisの1例. 日消外会誌 19: 997-1000, 1986
4. 早田 邦康, 米村 智弘, 岡 直郷他 : 腸間膜デスマイドの1例. 消化器外科10: 645-648, 1987



大網原発と考えられたepithelioid leiomyoma (leiomyoblastoma)

愛媛大学医学部 第一病理 杉田 敦郎、武井 由美
植田 規史、福西 亮

症例 842：60歳、女 職 業：主婦

臨床診断：卵巣腫瘍および腹水

既往歴：腎炎、肺炎

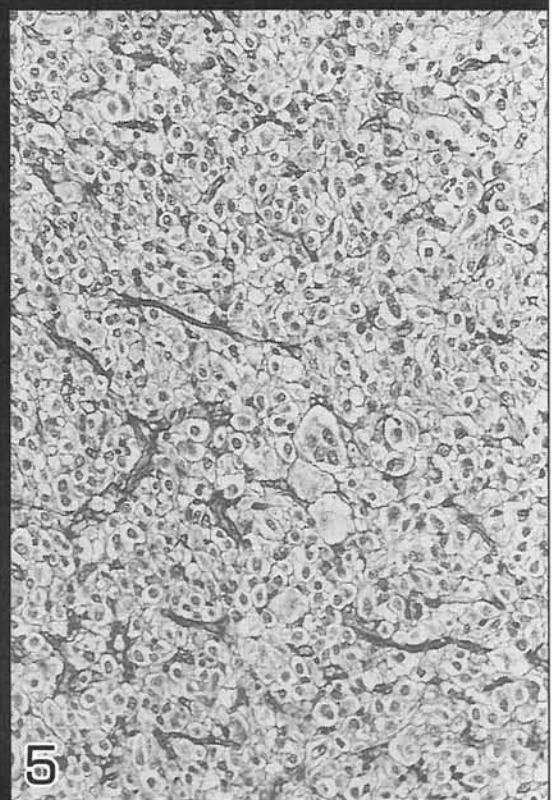
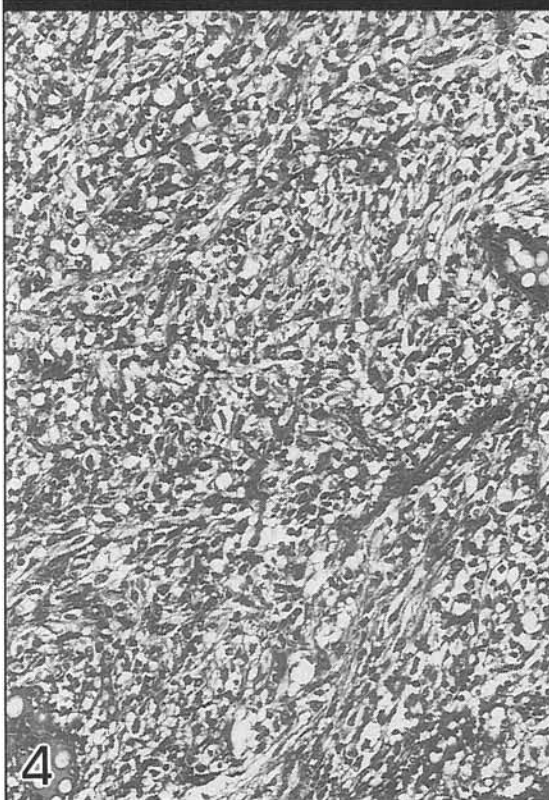
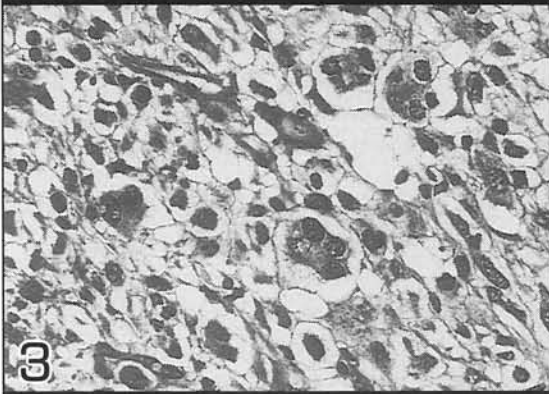
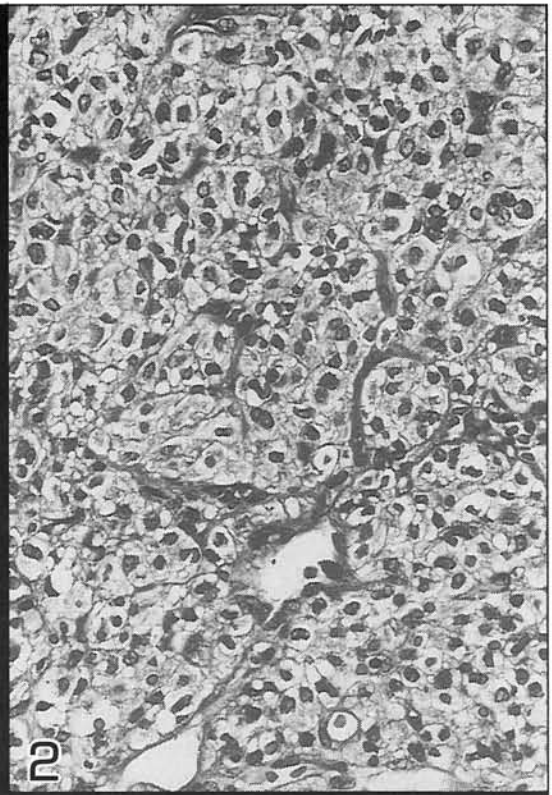
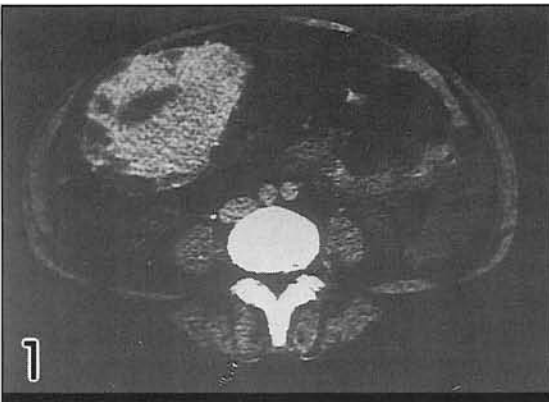
現病歴および手術所見：2～3カ月前より下腹部膨満感、下腹部痛、不正性器出血を自覚するようになり婦人科を受診した。体表より右下腹部に手拳大の腫瘤を触知し、CTで内部にlow density areaを含む直径約10cmの腫瘍と多量の腹水を認めた（写真1）。さらに腫瘍マーカーであるCA125が上昇しており、卵巣腫瘍を疑い開腹した。腫瘍は大網に被覆されており、6～8mm程度の太さの茎で胃体部後壁と連続していた。血管に富む軟らかい組織よりなり、充実性と嚢胞状の部分が混在した。周囲組織への浸潤は認められず、腫瘤を摘除しさらに接合部の胃壁を楔状切除した。

組織所見：腫瘍は小型の核と空胞状またはエオジンに淡染する類円形～多角形の胞体を有する細胞の腫瘍性増殖よりなり、腫瘍細胞は毛細血管性の間質を伴って敷石状あるいは胞巣状の配列を示すが、腫瘍細胞間には細線維成分が介在しており、一部には紡錘形細胞の束状配列も見られた（写真2、4）。また多核巨細胞も少数存在したが、細胞異型は強くなく、核分裂像はほとんど認められなかった（写真3）。PAS染色標本では、上皮性細胞様配列を示す細胞もPAS反応陰性で、介在する毛細血管壁の基底膜が染出された（写真5）。これらの所見よりepithelioid leiomyoma (leiomyoblastoma, low grade malignancy)と診断した。腫瘍と連続すると考えられた胃壁の組織学的検索では、固有筋層や漿膜下組織には著変はなく、腫瘍と胃との関連を示唆する所見は認められず、大網原発の可能性が考えられた。

考 察：1960年にMartinらが胃原発のround cell myogenic tumorを報告し、Stoutは1962年の報告でその生物学的態度からleiomyoblastomaと命名した。以来、epithelioid leiomyomaに対して同義語あるいは類似語としてleiomyoblastomaやbizarre leiomyoma等の名称が用いられており、WHOの軟部組織腫瘍分類ではこれらは同一の疾患単位として、benign smooth muscle tumorに分類されている。しかし報告例の中には転移例やepithelioid leiomyosarcomaと診断すべきものもあり、多くの報告においても生物学的性質が議論されている。胃原発のものについてはAppelmanらが127例について詳細な検討を加えており、良悪性の組織学的な判定基準として、核分裂像の数、細胞の大きさ、間質成分の介在や腫瘍細胞の配列様式などを挙げているが、腫瘍の大きさや発生部位、臨床症状なども含めて判断すべきであるとしている。大網原発のepithelioid leiomyomaは報告例が極めて少なく、その生物学的態度を判断する資料に乏しいが、Mashimotoらがまとめたこれまでの7報告例中には再発例や移転例は含まれていない。本例の場合核分裂像はほとんど認められず、組織学的に悪性とする所見に乏しいと考えられた。しかし、胃以外の部位に発生したepithelioid leiomyomaでは約半数が悪性の経過をとるとの報告があり、また33年の経過の後に再発した胃原発のleiomyoblastomaの報告もあることなどより、腫瘍の大きさも考慮して、low gradeではあるがmalignant potentialを有する腫瘍として長期間のfollow upが必要と思われる。

文 献

1. Mashimoto H, Matsuo T, Ikeda T, et al: Leiomyoblastoma of the greater omentum: A case report and review of literature. Acta Pathol Jpn 37: 1691-1698, 1987.
2. Appelman HD. and Helwig EB.: Gastric epithelioid leiomyoma and leiomyosarcoma (leiomyoblastoma). Cancer 38: 708-728, 1976
3. Miller KA., Rubnitz ME. and Roth SI.: Late recurrence (33 years) of a gastric epithelioid stromal tumor (Leiomyoblastoma) with low malignant potential. Arch Pathol Lab Med 112: 86-90, 1988
4. 武田 宏之, 平尾 幸, 木村昭二郎, 他: 大網原発巨大平滑筋肉腫の1例. 臨放 32: 1533-1536, 1987



長期透析患者に発生した骨原発悪性リンパ腫の1剖検例

市立宇和島病院 栗原 憲二

症例 844 : 59歳、女

主 訴 : 第1中足骨部の腫大

既往歴 : 53才の時、慢性腎炎による腎不全のため、週3回の血液透析をうけ始めた。54才の時、血中の副甲状腺ホルモンとアルカリフォスファターゼ上昇、正常カルシウム値、頭蓋骨の特有なX線像などより、二次性副甲状腺機能亢進による腎性骨異栄養症と診断され、活性型ビタミンD投与で軽快した。

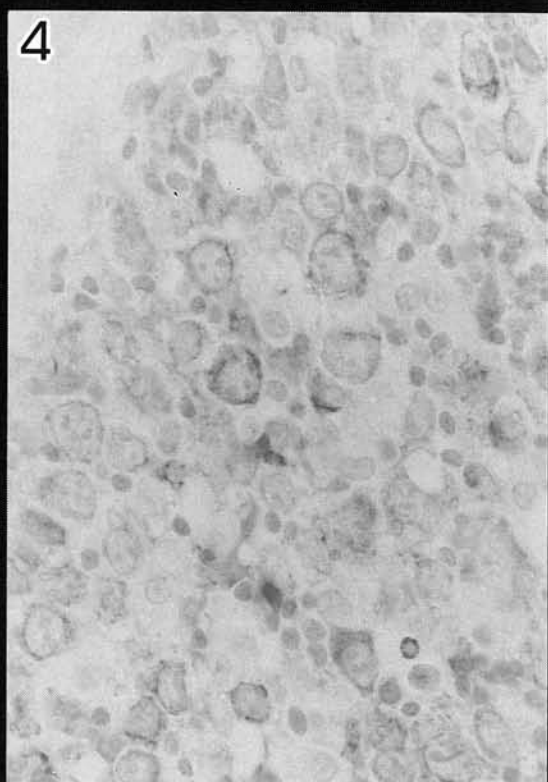
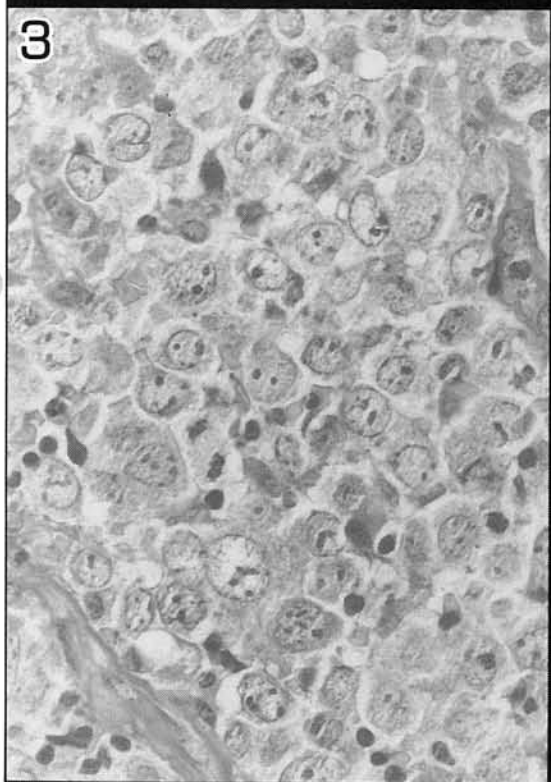
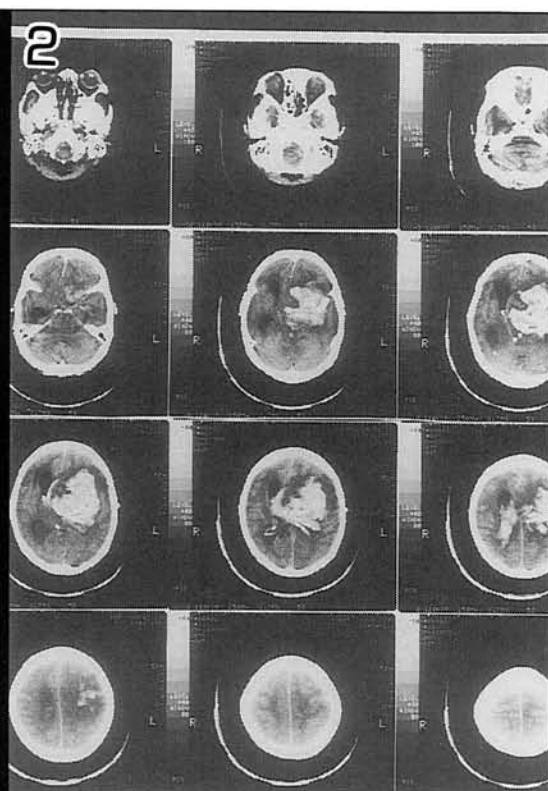
現病歴 : 死亡4カ月前より左足の疼痛を自覚し、3カ月前に左足の足背内側の腫大が著明となった。同部のX線検査で、第1中足骨に骨透過像と一部骨硬化像を認め(写真1)、骨腫瘍の診断で、生検をうけた。生検の結果、悪性リンパ腫(stage IE)の診断で、放射線療法で上述の腫大は縮小したが、この頃より、左側鼠径部のリンパ節の急速な腫大に気づき、同リンパ節生検でリンパ腫の転移と診断され、多剤併用療法を開始直後、少量を投与した時点で脳出血(写真2)のため死亡した。

病理所見 : 第1中足骨の生検標本には、腫瘍細胞のびまん性浸潤があり、腫瘍細胞は大型で円型の核と核小体を有し、核分裂もあった(写真3)。腫瘍細胞は豊富な好銀線維で取り囲まれており、免疫染色でLCA陽性、L-26陽性、MB-1陽性で、一部の腫瘍細胞は胞体内にIgMを有していた(写真4)。その他EMA、UCHL-1、MT-1、IgG、IgA、κ、λ、S-100、ナフトールASDなどはすべて陰性であった。LSG分類でびまん、大細胞型(B細胞性、IgM産生型)であった。鼠径部リンパ節の組織像も同様であった。剖検時、全身のリンパ節に浸潤はなく、第1中足骨原発を確認した。その他、両腎のglobal sclerosisと左心室肥大などを認めた。

考 察 : 従来骨原発の悪性リンパ腫として報告されている例は、現在のstagingの診断技術からみて、節性リンパ腫の骨転移例を含む可能性があり、骨原発のリンパ腫の発生頻度は実際には報告よりもまれと思われる。文献では軀幹骨や四肢骨に多く、自験例のように四肢の末端骨での発生はまれである。組織学的に自験例は従来は細網肉腫と分類されたと思われる。またB細胞性でIgM産生を認めたが、腫瘍の大きさが小さいためか、血中M蛋白は検出出来なかった。現在節外性リンパ腫のうち、B細胞性の発生母地として種々の慢性炎症があげられており、また長期透析患者では悪性リンパ腫などの腫瘍の発生頻度が高いとの報告もある。自験例でも腎性骨異栄養症が発生母地となった可能性があり、長期透析患者では意外な部位での骨原発悪性リンパ腫が発生しうる事は、早期診断上注意を要する。

文 献

1. Radaszkiewicz T, Hansmann ML : Primary high grade malignant lymphoma of bone. Virchow Archiv A Pathol Anat 413 : 269-274, 1988
2. Falini B, et al. : Large cell lymphoma of bone. Histopathology 12 : 177-190, 1988
3. Kinlen LJ, Eastwood, JB, Kerr, DNS, et al. : Cancer in patients receiving dialysis. Brit Med J 1 : 1401-1403, 1980
4. Kantor AF, et al. : Cancer in patients receiving long-term dialysis treatment. Am J Epidemiol 126 : 370-376, 1987
5. 青笹 克之, 大澤 政彦, 松本 正博 : 免疫異常とリンパ球増殖性疾患, 病理と臨床 7 : 954-958, 1989



外陰部潰瘍性病変 (Pemphigus)

国立病院四国がんセンター 土井原博義、万代 光一
元井 信、森脇 昭介

症例 805 : 41歳、主婦

臨床診断 : 外陰部潰瘍 (Herpes 感染症疑)

主 訴 : 外陰部痛

既 往 歴 : 15歳から3年間肺結核で通院治療

現 病 歴 : 昭和62年12月初めに外陰部痛あり、某医院で対症療法を受けるも軽快せず、当院に紹介され、入院となる。

局所所見 : 外陰部から肛門周囲に至るびらん、軽度潰瘍形成をみ、さらに口内炎の合併がある。臨床的にはヘルペス感染が疑われた。病変部から約8×5mm大の切片を生検・採取する。

入院後経過 : 患者は約1カ月入院、抗生物質・抗ウイルス剤投与で軽快退院した。

病理組織学的所見 : 潰瘍部から離れるほど表皮の解離はあるものの剥離せず、全体に層は厚くなる。さらに遠位部では表皮は下部に乳頭状肥厚をし、基底層は分岐状に不規則増殖する(写真1)。表皮剥離や浅い表層性潰瘍形成、潰瘍底部および周囲の真皮に慢性炎症性細胞浸潤をみる。

表皮の基底層と有棘細胞層の解離部は(写真2)、表皮内に不規則な水泡様組織間隙をみ、線維素の出現、剥離表皮細胞や炎症細胞が遊離・浮離する。解離部は基底層が乳頭状を呈し(写真2-3)、残存基底細胞は明瞭な腫大した核小体を1-3個有し増殖する(写真4、6)。核分裂像も少数みられる。

解離部の扁平上皮細胞の核は淡明、腫大するが(写真4、6)、風船様腫脹や封入体、多核巨細胞などは確認できない。

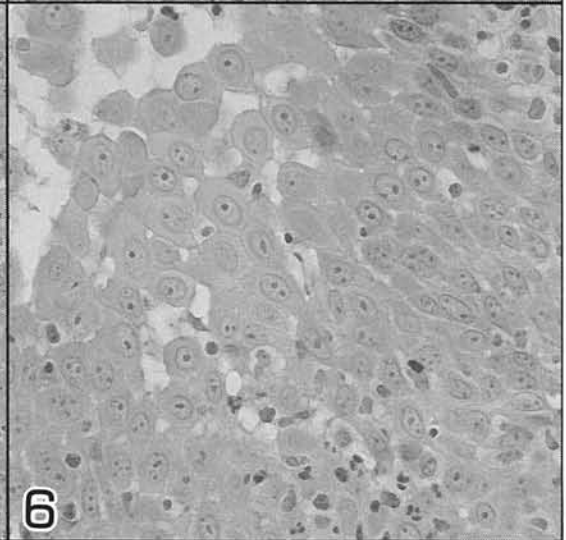
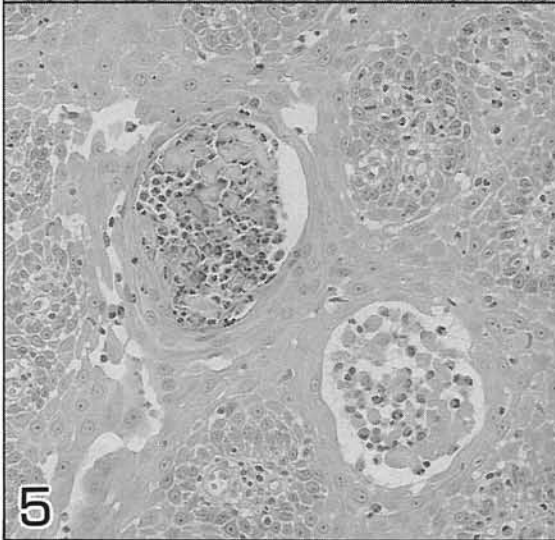
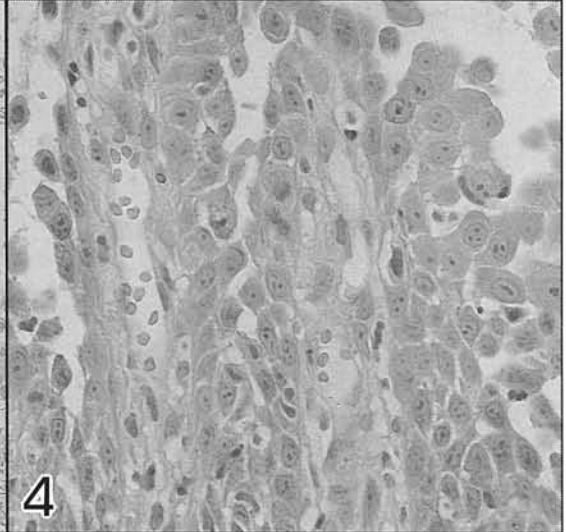
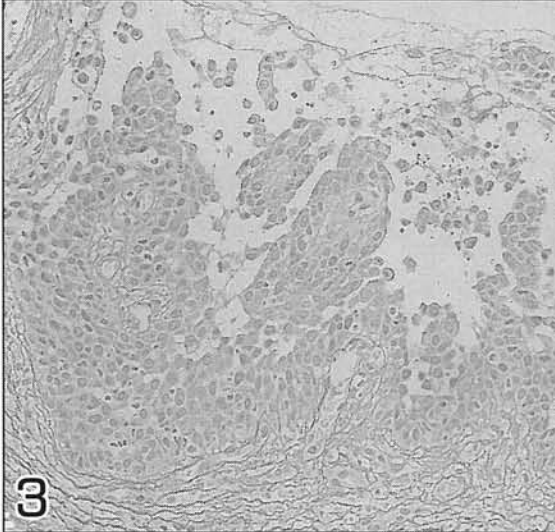
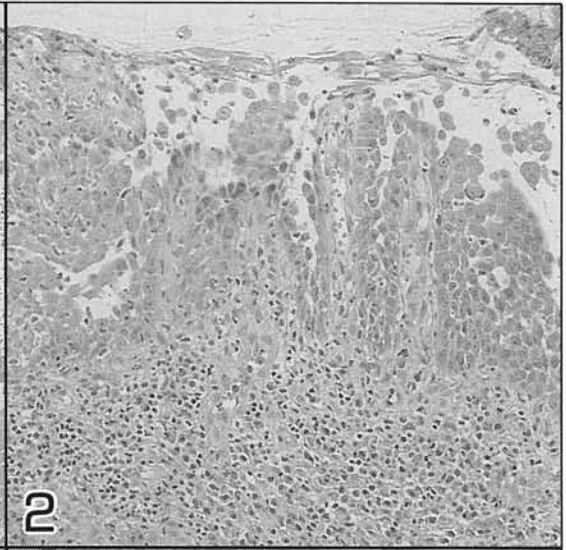
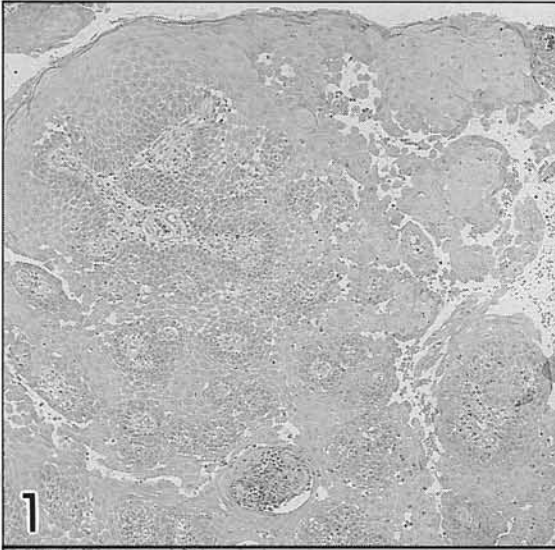
鍍銀染色で解離部の基底膜は保たれている(写真4)。周辺の肥厚真皮内には高度の炎症細胞の浸潤があり、好酸球の遊出が巣状にみられ、炎症は表皮内にも波及し、微小膿様形成もみられる(写真5)。

考 察 : 外陰部に棘融解性水泡 (intraepidermal acantholytic bullous) を主病変とし、口内炎を有することなどの所見からPemphigusの範中に入る病変を考えた。慢性天疱瘡は病変によりvulgaris (尋常性)、vegetans (増殖性)、foliaceus (落葉性)、erythematous (紅斑性) の4群に分け、それぞれ独立した疾患とする見方、相互に移行があるとする報告もあり、pemphigusの本態が不明である。尋常性もっとも多く、女性で40-60歳代に多い。本例は剥離と増殖を混在することからpemphigus vulgarisないしvegetansあるいはfoliaceusの移行像が混在すると解したが、頻度からもpemphigus vulgarisとするのが妥当と考える。

口内炎をみることから臨床的にはBehcet病も疑われているが、口腔粘膜の組織学的検索はなされておらず、外陰部病変の主体は表皮にあり、真皮は非特異的炎症の所見であることから否定した。また外陰部ヘルペス感染症は臨床的にも疑っているように、まず鑑別すべき疾患であり、herpetiform pemphigus acantholytic herpetiform dermatitisの名称もあるように、鑑別が困難例があることも記載されている。しかしヘルペス感染症に特異な細胞の出現から組織学的診断は比較的容易であり、細胞診も含めてヘルペス感染症とする積極的所見を確認できなかった。

文 献

1. 現代皮膚科学大系 12 : 166-187、中山書店、東京、1980
2. Graham, JH, MacVicar, DN. : Bullous dermatoses, Graham JH, et al ed., Dermal Pathology. 269-323. Harper & Row, New York, 1972





あ と が き

昭和38年に始めたこの検討会も28年の歳月がすぎ、おおくの症例が検討された。その間昭和40年に記録集を『愛媛県衛生研究所報告』のなかに収録して戴いたが、通算3号から世話役の森脇が当時の国立松山病院に転任したのを機に、独立誌として年1回発行してきた。しかし会員の増加、時代の変遷とともに各種研究会、中四国病理集談会、スライドカンファレンスなどにより、愛媛県内の検討会の回数減に続いて、記録集の発刊も延び延びとなった。

前回検討症例一覧表が欠除していたのでその分も含め表示したが、記録が不十分で不完全な上、掲載症例も予定の件数にも至らず、貧弱なものになったことをお詫びする。

9号の編集から持ち回りで行ない今回で通算16号を数えたが、病院病理医協会加入と同機関誌への寄稿なども併せ、本誌の意義・役割も薄れてきたことから、今回をもって終刊とすることになった。

最初から関わった者として寂しい気持がするが、これも時代の流れと考える。検討会はお中堅の人によって継続されるので、衣を換えてさらに発展することを願って、編集・終刊の言葉とする。長年本誌の発刊にご支援戴いた愛媛県・松山市医師会、愛媛県がん予防協会に深謝する。

1991. 5 .30

S.M.

平成3年7月30日 印刷

平成3年7月30日 発行

発行所 松山市堀之内13 TEL 0899 ② 1111

国立病院四国がんセンター病理内 (〒790)

愛媛県臨床病理研究会

印刷所 松山市朝美2丁目3-30 TEL 0899 ④ 7912

兵頭印刷所

